
THE UFO RESEARCHER

Sky People Association-west Japan

C P R -Japan

Kiyoshi Amamiya

193-5, Byodobo-cho, Tenri-city

Nara-pref. 632-0077 JAPAN

E-mail : ad472@mahoroba.ne.jp

<http://www19.u-page.so-net.ne.jp/rc5/mtsuda/ufoframe.htm>

VOL.14 NO.2 2002



The modern history of UFOs began here.



LATEST UFO PHOTOS FROM MALAYSIA.

Ahmad Jamaludin

Two witnesses were traveling in a car near the Kuala Lumpur International Airport in Sepang, Malaysia sometime in February 2002 when they spotted an object flying across the airspace over the airport. They quickly realised that it is not an airplane because it had no tail or wings. One of the witnesses, a moment before the UFO appear, was taking a photograph of a commercial jet that was landing at the airport (see photo of plane landing). With the camera already in his hands, he immediately snapped three photos of the unidentified object as it flew away from the area.

Their car was moving at that time, so they could not



hear if there were any sounds coming from the grey object. The disc-shaped UFO was not flying very fast and it was flying about 500 feet off the ground. At the moment, this is the best daylight photo of a UFO taken in Malaysia.

There was some UFO activity in the northern part of Peninsula Malaysia in January and February 2002. A triangular-shaped UFO was sighted twice flying low over the sea off Penang Island. In another occasion, two bright UFOs hovered over the island on two different days. So the first half of 2002 has been an interesting year as far as UFOs are concerned. We are still waiting for the UFO occupants to show themselves. It would be very exciting if we could have a picture of them!.

マレーシアからの最新のUFO写真

Ahmad Jamaludin

2002年2月のある日、2人の目撃者がマレーシアを旅行中、セパンのクアラルンプール国際空港の近くの自動車において、空港上の領空を横切って飛ぶ物体を見つけた。

それは、後部または翼を持たなかったので、素早くそれが飛行機ではないことを悟った。目撃者のうちの一人は、UFOの現われる前の瞬間、空港に降下する商用ジェットの写真をとっていた。(飛行機上陸の写真を参照)

既にカメラを手にして目撃者は、飛行機がそのエリアから遠ざかるとともに、直ちに未確認のオブジェクトの

THE UFO RESEARCHER

Magazine of SPACE & UFO FACTS

Editor: Kiyoshi Amamiya
Managing Editor: Yuki Amamiya
Associate Editor: Osamu Sato
Taira Fuji
Fumi Kohara
Mari Saito
Illust. Associate: Shima Amamiya
Photographic Asst.: Tatsuya Inui
Research Staff: Hirokazu Fuzihira
Circulation Dept. Masaya Komagamine



REPRESENTATIVES and CORRESPONDENTS
are located all over the World.

Exchange Partners: SKY PEOPLE ASSOCIATION

Japan Space Phenomena Society
Kazuno UFO Research Association
Takao Ikeda(MUFON's news National Director for Japan)
The UFO Criticism by J.N. from Japan
Tugio Kinoshita(Director of UFO Contact house)
Utopia Network

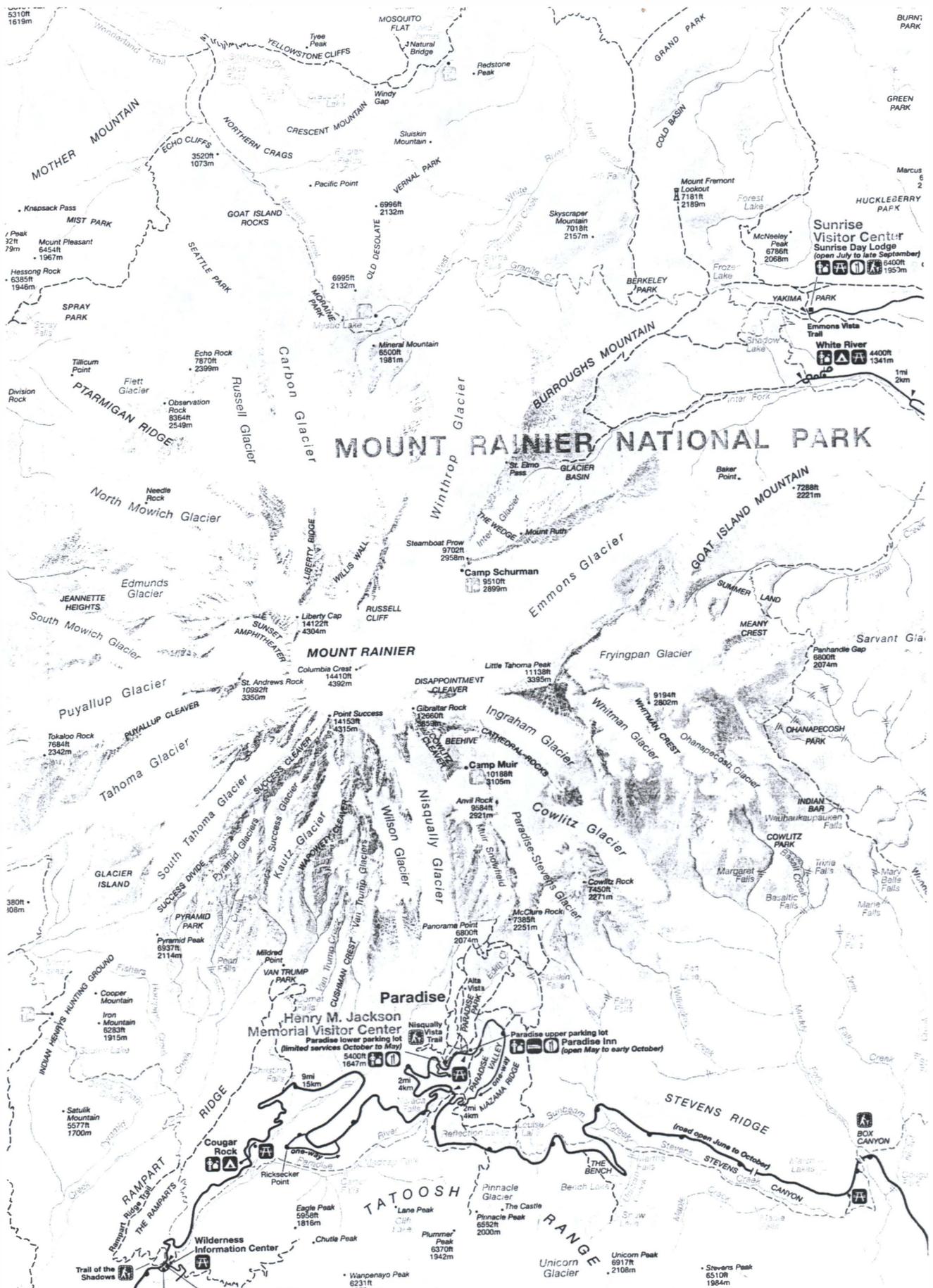
Robert K. Lesniakiewicz(Poland)
Malopolskie Centrum Badan UFO i Zjawisk Anomalnych(Poland)
JUDr.Jiri KULT(Czech)
Milan Dolezal(Czech)
Takashi Okamura(U.S.A)
Ph.D. Richard F. Haines(U.S.A)
C.P.R.international(U.S.A)
AFU(Sweden)
THE JOURNAL OF UFO RESEARCH(China)
UFOlogy Quarterly(Taiwan UFOLOGY ASSOCIATION)
HUNAN PROVINCIAL UFO RESEARCH SOCIETY(China)
Beijing UFO Research Society(China)
Cheng Bainian(China)
Wu Jia Lu (China)
UFOlogy Research Institute of ShanXi(China)

CONTENTS

- Cover: Mount Rainier on June 24,2002
- LATEST UFO PHOTOS FROM MALAYSIA(1): Ahmad Jamaludin
- Until standing on Mt.Rainier on June 24,2002 after meeting with my comrade for the first time in 30 years: Kiyoshi Amamiya
- UFO over Lake Hu-gu(China):THE JOURNAL OF UFO RESEARCH/Liu Feng Jun
- Crop circles in Poland:Robert K. Lesniakiewicz
- IN ONE AND BEAUTIFUL AFTERNOON: Jerzy Strzeja
- Japan UFO Symposium 2002:Kiyoshi Amamiya
- Sad news! UFO investigator Mr. Takao Ikeda sudden death
- Over Northeast Japan, the object of a mystery stay in the air by continuation for two days.
- LATEST UFO PHOTOS FROM MALAYSIA(2): Ahmad Jamaludin
- UFOs over Tokyo:Satoshi Koori

THE UFO RESEARCHER published by SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN, Printed in japan.

© 2002 SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN



■表紙説明:この地図の「Paradise」で撮影した2002年6月24日午後3時頃のレイニア山。日本語の地図や文献には「レーニア山」「レニエ山」とも記載されている。編者撮影。



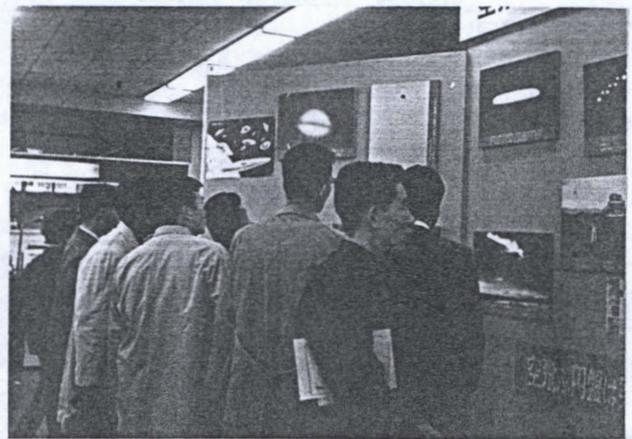
■1962年6月23～24日、茨城県筑波山つつじヶ丘における「第15回国際円盤デー」空飛ぶ円盤観測会。編者撮影



■1962年6月24日早朝、日の出方向に何かが見える、とのことで、双眼鏡で観察する編者。天宮壮吉撮影。この観測会でバルブ撮影した数枚には、人工衛星と考えられ直線的な光跡が写っていた。また1枚には湾曲した幅のある光跡が写っており、これは流星とも人工衛星とも言えない謎の光跡である。



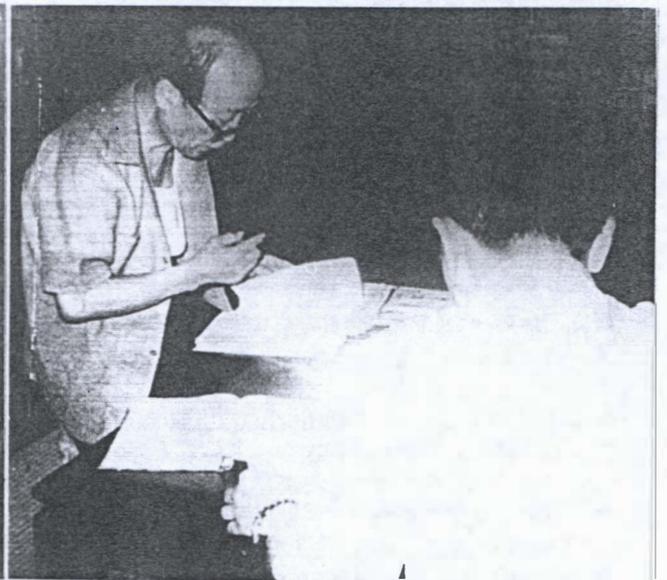
■1963年頃、CBA松村最高顧問も出席した「若人の会」。右端が学生服姿の編者



■1964年頃、東京銀座で行われた「空飛ぶ円盤写真展」



■1970年、茨城県の装飾古墳を車2台で巡り、荒廃した石室内部の装飾を探索した。左端の後ろ姿が岡村堯氏。



■1970年、岡村氏と天宮は、車で紀伊半島の古代遺跡を巡った。熊野の郷土研究家の家で、全国の怪火資料を調べる岡村氏。

同志との30年ぶりの再会を果たし、 2002年6月24日レイニア山に立つまで

天宮 清

1947年6月24日、米国ワシントン州レーニア山上空を飛行していたKenneth Arnoldは、高速で飛行する9個の謎の物体を目撃した。その未知の物体は、Flying Saucerと名付けられて世界に広まった。そして、世界中の人々が「私もそれと似たような物を見た」と名乗りを上げ、目撃報告が空軍や学者の下に集まった。国立、民間のUFO研究組織が誕生し、軍人、科学者、政治家もUFO問題の解明に参画した。6月24日は、Flying Saucerの記念日「国際空飛ぶ円盤デー」となり、世界各国で民間の講演会やシンポジウムなどの記念行事が行われてきた。その記念行事に「UFO観測会」というイベントがある。それは、大勢の人が一箇所に集まって、空を観測し、UFOを発見しようと試みるものである。

1960年、私は日本の民間UFO研究団体CBAに入会した。CBAは、1962年6月23日土曜の夜から24日の朝にかけて、茨城県筑波山において「国際空飛ぶ円盤デー」15周年を記念したUFO観測会を行った。私は100人を越える人々に混じって、山の上で空を見上げた。

今年(2002年)は1947年から55年目を数える。また、私が初めて参加した「国際空飛ぶ円盤デー」から40年目にあたる。私は2年前の夏、私の古い研究仲間がアメリカのシアトルに住んでいることを知った。彼の名を岡村 堯という。彼はレーニア山の見える町に住んでいた。私は彼とメールを交換する過程で、「いつの日か、二人でレーニア山に立とう!」と約束をした。その日はついにやってきた。2002年6月24日、我々はレーニア山に赴き、空を見上げた。ここにその経過を報告する。

■30年前のこと

「自分で決めた事は果たさなければならない」……こんな悲壮な決意を持って、私自身にとってかなり困難と思われた行動計画を、なんとか無事終了した今、これを書いている。

2000年8月にシアトルに住む旧岡村堯氏と連絡がとれて以来、彼とEメールでやりとりしながら、情報交換・意見交換を行ってきた。

彼と私は1963年頃から1967年頃まで、日本の民間UFO研究団体の一つCBAの会員としても東京支部の一員として、および東京学生サークルの一員として活動を共にした。

CBAとは、Cosmic Brotherhood Associationの略で、日本語名を「宇宙友好協会」という。この団体は、1957年8月に結成された。創設者の松村雄亮氏は日本航空界に貢献した父を持ち、父を助けスイスの航空雑誌INTERAVIAの日本通信員として活動した。その過程で世界のUFO情報を入手、1956年に日本最初のUFO研究団体Flying Saucer Research Group in Japanを結成した。

1960年代におけるCBAは、日本最大の会員数を擁し、北海道から九州までの各地で、UFO観測会やUFO展示会

を行い、活発な活動を展開した。

岡村氏は、私が1963年から編集を担当したCBAの青年向け機関誌『空飛ぶ円盤ダイジェスト』の編集、印刷の共同作業者であった。私が風邪で寝込んだ時は、岡村氏が私の代わりに『空飛ぶ円盤ダイジェスト』の印刷をした。彼はまた、1965年前後における北海道日高平取ハヨピラ公園の建設工事に長期間参加した。この公園「ハヨピラ(HAIOPIRA)」は、CBAによってアイヌの文化神オキクルミカムイの人類に対する教化善導の恩恵に感謝のモニュメントとして建設された。

当時、私の拠点は東京の中心に近い「田端」という町にあった。田端が私の育った町である。現在は80才を過ぎた母が5階建てマンションのオーナーとして一人で暮らしている。

1967年頃、私が一時、CBAの本部を離れ、フリーになったとき、岡村氏は私を「大学連合UFO研究会」という彼の作った組織に誘ってくれた。その頃、彼はスライドを使用したUFO問題の解説を手がけていた。特に軍事的な状況にUFOが出現し、攻撃火器や運用システムに何らかの影響を及ぼした事件を材料にして、彼はストーリーを構成した。彼は多くの大学生を指導し、その作品は大学の学園祭で上映された。

彼はUFO問題を人類の歴史の上に位置づけ、高い知性が歴史に関与した事例を以て、宇宙人地球来訪の意義を知らせようとしていた。その基礎的な知識はCBAから学んだものである。厳密に言うと、CBAの指導者、松村雄亮氏のセオリーを我々は踏襲した。松村氏のセオリーを検証し補強しつつ更に発展させよう和我々は試みた。「その構成は理論的に展開すべきだ」というのが岡村氏の主張であった。

私と岡村氏はまた、古代インディアンなどの岩絵や伝承をはじめとする多くの古代史に関する資料を収集し、そのデータブックを作成した。田端の私の家が重要な活動の場となったのもこの頃である。

また我々は、人類の歴史と宇宙来訪者(Ancient space visitor)の関係を長編のスライドで表現する大きな計画を立てた。無数の文献や写真集を調べ、我々の構成に必要な写真を見つけて複写した。資料をリバーサル・カラーフィルムを用いて完全に接写するためには、様々な技術と道具を必要とする。私は当時、まだこの技術を持っていなかった。岡村氏はすでに大学連合UFO研究会のスライド制作過程で、この技術を会得していた。したがって、私は彼と共に複写作業を行う過程で、これらの技術を彼から学んだ。そのおかげで、私は1974年、CBA発行の『UFOニュース』に掲載された写真の複写とプリントをすべて自分一人でやる事が出来た。(この頃、岡村氏はすでに日本からカナダに移り住んでいた。)

さて、岡村氏と私は1970年の夏、奈良県、和歌山県に点在する古代遺跡や聖地を彼の車で巡った。すでに東名高速道路が開通し、東京から関西へは宿泊せずに行けるよう

になっていた。私と岡村氏は交代で車を運転した。出発した直後は雨が降り、高速道路を時速100Kmで走行する時、濡れた路面は氷のように感じられた。奈良県の三輪山周辺を歩きながら、私は彼に言った「こんな所に住んでみたいな」。すると彼は言った「遠くから、たまに来るから新鮮で良いんだよ」。だが、計らずも、私は現在、三輪山の見える「天理」という市に住んでいる。

■出発までの日々

私は今年5月始めに気管支炎を患いながら『THE UFO RESEARCHER』2002年1号を編集した。大阪でコピーし、自宅で製本した。その発送が済んだのは5月30日であった。

6月に入ると、毎月UFO記事を執筆しているアダルト雑誌の締切が迫ってきた。私は新しい企画を考え、それに基づいて資料や写真を集め始めた。6月末から7月にかけては、たぶん忙しくなると思い、2ヶ月分の原稿を仕上げ出版社に送った。

6月8日は会社が休みだった。私は旅行会社JTBに行き、旅行障害保険に加入した。その時、岡村氏に購入を依頼した航空券の読み方を教えてもらい、同時に関西国際空港までのリムジンバスの切符を買った。

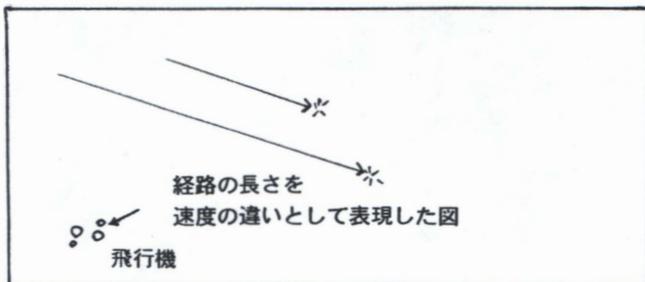
その10日後の夜、私は不思議な光を見た。

即ち6月18日午後9時30分、私はいくつかの手紙と2冊のTHE UFO RESEARCHERを投函するため、自宅から郵便ポストまで自転車に向った。通常なら約1分の道のりだ。自転車を走らせつつ、私はシアトルの岡村氏との再会を頭に描いていた。すると正面の東の空に二つ並んだ星が見えた。しかし、左の星は激しくまたたいている。「これは飛行機か?」と思いつつゆっくり走りながら、観察した。

やがてまたたく星は上方へ移動した。こちらに向かってくるようだった。「これは本当に飛行機だろうか?」と思った。その光は単独で、飛行機にあるべき灯火類がなかった。するとまた同じまたたく星がその左斜め下方に現われた。星を含めてそれらが三角形を成して並んだ。その中の一つは本物の星である。

次第に三角形がゆがみ、またたく光は頭上に迫ってきた。赤系、青系の様々な色彩が周囲に放射し、それが激しくチカチカとまたたいているが、飛行機にあるべきランディングライト(東からの場合、着陸態勢に入っている)、通常の点滅灯が見えない。私は自転車をとめた。頭上なのに、その光は見え方に変化はなく、相変わらずのチカチカ光点であった。すると後から現われた光点が加速して、みるみる最初の光点に追い付き、前の光体の下を通過して、たちまち抜き去っていった。見かけの早さは低空を飛ぶ飛行機以上に速いのに、チカチカ光点のままである。

私は今まで、同じ高度の飛行機同士が見ているうちに追い越す、という現象は見たことがない。高度差がある場合はすぐそれとわかる。また、どんなに高空でもオレンジの灯火や赤い点滅灯はよく見える。



その直後、飛行機が西から東へ向かうのが目に入った。低空で大きく、ライトも飛行機特有であり、先ほどの光と比べ見かけの速度は格段にゆっくりしていた。「すると、さっきのは何か?」と思った。

あわてて西の空を見たが、2つの光はもう何も見えなかった。それと同時に、昔、電車に乗っていて、2つの白いUFOが接近し、後から来た方が前のUFOの下を通過して追いつくのを思い出した。この時は河合浩三氏との再会について考えていた。

また、チカチカする様子は、昔、双眼鏡で観察した人工衛星状の光体の激しい点滅に似ていた。

18日の夜は快晴で、雲はなかった。念のため、翌日の夜9時半前後、自転車で周囲を走りつつ空を観察したが、東からの飛行機の通過はなかった。

私はこの出来事を書いて岡村氏にEメールで知らせた。そして米国へ持っていく資料の作成をした。メインはTHE UFO RESEARCHER1989年から1994年までのバックナンバーのファイル制作であった。長い間放置していた版下は、紙がはがれたり、シミがついていた。これを少しづつ近くのスーパーでコピーした。また、収納する適当なリング・ファイルを見つけるために、天理市内の文房具売り場を巡った。すべてのページが見開きで見られる適切なリング・ファイルが、私の必要な数だけ置いてあるのを発見した時は安堵した。もう出発日まで時間がなかった。

最大の問題はロサンゼルスでの乗り継ぎにあった。私はインターネットやガイドブックで空港の様子や手続きについての情報を得た。覚え書きとして「PROJECT ANTI-NUCLEAR & CEREMONY」と題した旅行日程を作成した。旅行中、ずっとポケットに入れてメモを記入したこの紙は、ヨレヨレになっていま手元にあるが、要所要所における予定時刻に実際の時刻などを記したものだ。万一に備えて末尾に岡村氏宅の電話番号を記したが、電話に必要な25セントコインを持つのを忘れてしまった。

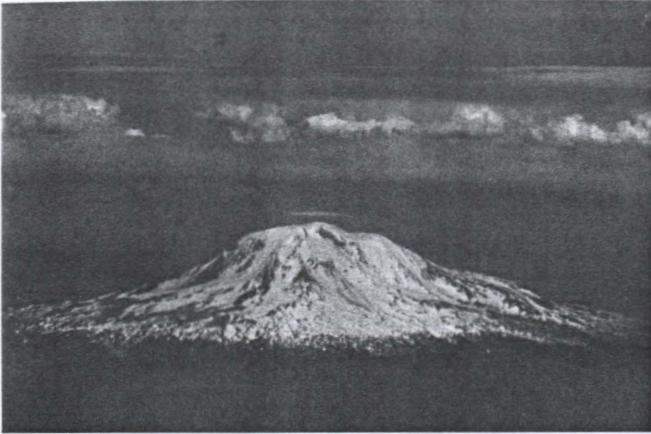
■やっぱり迷ったロス空港

6月22日午前11時30分、妻の自転車に荷物に乗せ、妻と共に自宅を出た。手荷物は撮影器材の入ったショルダーバッグと資料と衣類の入った小型のスーツケース。前裁駅発11時47分の京都市行き急行で近鉄奈良までゆき、奈良駅近くの停留所から午後1時05分発のリムジンバスに乗った。空港到着は午後2時30分。2時39分、日本航空カウンターにて搭乗手続き。係員からスーツケースの中を全部調べられ、品物について説明。セキュリティチェック済みの札が付けられた。

午後3時1分、出国手続き。出国カードを書いて審査員に渡すと、「日本人はもう書かなくてよくなりました。帰りのパスポートだけでOKです」と言われた。出国カードは外国人だけが書くものになった。また、2650円の空港使用料も航空運賃に含まれる、という事で支払わずに済んだ。

午後5時46分、JAL60便、B747-400は離陸。私はロサンゼルスまでの10時間におよぶ飛行に耐えることとなった。様々な意味で辛い時間だった。

時間を遡り、同じ日の午前11時19分にロサンゼルス空港に到着した。私はそのあまりの広さと雑然とした様子に驚いた。バスに乗せられてトム・ブラッドレーターミナルへ向かう。入国審査の順番を待っていると「ここは多い、あっちが少ない」と親切に教えてくれる青年のおかげで、少ない列で順番を待った。ここでは口頭で説明する、とガイドブックにあったので、頭の中でフレーズを復唱する。



■出現の様子が録画された雲。左がフィルムコマNo.19
右がNo.28。この間、上空の雲は変化した。

ところが審査員は「カンコウデスカ?」と日本語で聞き、私も「ソウデス」と答えただけで済んでしまった。手荷物受取の場所で「JAL-60」を捜し、荷物の出てくるのを待つ。妻がつけてくれた目印の2匹のベア人形が見えた。スーツケースを転がして進むと、「航空券再確認」のカウンターがあり、そこで航空券を見せると「荷物を少し離れたベルトコンベアーの上に置き」との指示でそこへ置く。「乗り継ぎの場合は預け直す」と書いてあったのを思い出す。

「アラスカ航空はどこか?」と聞くと、「外に出て左に折れ、NO.3のビル」だという。建物の外に出ると、まるで町の中のように大勢の人、タクシーの列が並んでいる。どこが「No.3」なのかわからない。とにかく左に折れてかなり歩いて建物に入ると「アラスカ航空貨物」のカウンターがあったので、そこに入った。そこで聞くともっと先だという。ようやく、アラスカ航空のカウンターに着いて、手元を見ると何とパスポートを持ってない。「あれっ!?!」と思うのと「ドキッ!!」が同時に来て青くなった。「どこかに落としたのか?」と考えを巡らせる。「そうだ、アラスカ貨物のカウンターに一時置いたっけな」と思い出し、急いでアラスカ貨物に戻ると、やはり私のパスポートが置き忘れた状態で置いてあった。彼らに笑顔を見せてそれを取り戻し、再びアラスカ航空のカウンターに戻る。列に並ぶと、汗が噴き出してきた。周囲からジロジロ見られる。「なんでこの人、こんなに大汗をかいてるんだろ?」と思われたようだ。「席はどっちにするか?」と聞かれたので窓側を頼んだ。「運良くレイニア山を空から撮れば」と思った。とにかく喉が乾いたので、搭乗ゲート近くの売店で清涼飲料を買って飲んだ。

■機上から気になるものを撮影

アラスカ航空に搭乗する前、私は2度もセキュリティーチェックを受けた。バッグの中味、身体検査、脱いだ靴は一足づついねいに調べていた。搭乗直前はビデオカメラを実際に映してみせろ、と言われ、係員にファインダーに映る画面を見せた。最後に「日本語でサンキューは何と言うのか?」と聞いたので「アリガトウ」と答えた。本当の日本人かを確認したように思えた。6ヶ月間、英会話教室に通った効果であった。

ようやくアラスカ航空287便MD-80の座席に落ち着いた。安心したのか、急激に眠気を催し、目が覚めると飛行機はいつの間にか空を飛んでいた。座席が主翼の位置より突き出した前部にあるせいか、B-747のような騒音は聞こえず、「シューッ」という静かな音がしていた。ロサンゼ



ルス周囲は荒涼とした砂漠であった。茶色と灰色のシワ模様の連続は、まるで火星の表面のように感じられた。

ときおり襲う眠気と戦いつつ、下界の珍しい光景や飛行機雲の動きなどを撮影し、ふと窓の下の白い雲に目をやると、丸い虹のようなものが見えた。飛行機と連動して移動しているの、飛行機の影の周囲に出来た量だと思った。幾重にも同心円があり、中心部に影のような芯があった。これが飛行機の影だろうか? 私はとにかくそれを撮影することにした。光学的な現象としても、珍しいものであり、まさかUFOではないだろうが、飛行機に繋がれたような飛行をみせるUFO(ロシア機TU-134Aの場合など)もあるのだから、研究資料としても価値はある。

いま、ビデオを再生して見ると、中心部は黄色、その外側が赤、次に青味を帯びた白、そしてまた赤、次にまた青、一番外側は赤だった。赤といっても赤みを帯びた色彩、といったほうが正確である。これを図に描くと6重の同心円となった。妻はこの映像を見て「日の岡古墳の太陽マークに似ている」と言った。確かに、うっすらとした現状の壁画の写真を見ると、よく似ていた。

背後に雲のない空間でもそれは見えた。同心円はないが、中心にある黄色とオレンジの混ざった光の塊が見え、ビデオカメラのファインダーでも確認できた。地上の暗い景色がその光が通過する時に明るく見え、光が過ぎると背景は暗くなったから、空間に光として存在しているようだ。早送りで見るとその「存在」が明瞭になった。「いきたい、これはどういう原理で見えているのだろう」と思った。それはいつの間にか見えなくなっていた。



■太陽光線の量は雲に映ったが、雲のない空間では黄色い光の塊に見えた。

再び眼下に見える珍しい風景を撮影していると、雪を戴いた美しい山が見えた。私はビデオカメラでその山をズームアップした。後でわかったことだが、その映像に、上方の灰色の雲の下にスーッと白い弓のような葉巻形の雲が現われた。撮影当時は、いつの間にかそれが現われたように思った。見かけ上、山頂スレスレにクッキリとした形が見えた。私はビデオと望遠300mm付スチルカメラでそれを撮影した。すぐ近くにも山が見えた。そしてさらに進んだ時、より巨大なゴツゴツしたたくましい山が現われた。いま地図で見ると、最初の美しい山がアダムス山、その下方に見えたのがセント・ヘレンズ火山、そして最後に現われた山がレイニア山であろうと思われる。

最初に見た白い葉巻雲は、3つの山を山を撮影した最後にも依然として変化なく写っていた。

■ついに岡村氏と再会!

出発した時と同じ、22日午後5時33分、飛行機は無事にシアトル・タコマ空港に到着した。Immigrationのサインにしたがって通路を進んでいると、誰かに手をつかまれた。見ると岡村氏だった。「久しぶりだなあ!!」我々は再会を喜び合った。一瞬にして30年の空白が縮まった思いだった。

「荷物を受け取らなくては…」と二人でいくつものターンテーブルに向かった。しかし、なかなか「AS-287」の表示が出ない。「小さい、あれ位のスーツケースで、熊の人形が二つついている」と彼に説明し、二人で別々のターンテーブルを見張った。「ありましたよ!」と岡村氏が私のケースを見つけてくれた。なんと、人形は1個失われていた。「荷物がこすれて取れたんでしょ」と彼は言った。

駐車場から彼の車に同乗し、目が回るようなラセン通路を降って地上に出た。天候は晴れ。確かに日差しが強く、気温は日本とさほど変わらないが、外の風が冷たくて心地よい。

ワシントンやニューヨークでバスには乗ったが、こうして乗用車に同乗し、左ハンドル右側通行をじかに体験するのは初めてだった。

昔、手塚治虫のマンガで見たような立体的な高速道路が曲線を描いて交差している。高速道路は快適で渋滞もなく、対向車線の車の多くがヘッドライトを点灯しているのが珍しかった。岡村氏の話によると、安全対策の一つで、我々の乗る車も、エンジンをかけると自動的にライトが点灯すること。日本では雨天など視界の悪い日以外は、2輪車だけがライトをつけている現状だ。

■岡村宅にて

シアトルの郊外、ベルビューの閑静な住宅地に彼の家があった。車を降りて玄関に入ると、笑顔の奥様が現われた。私は「こんにちは、天宮です。お世話になります」と型通りの挨拶。奥様はにこやかに私の到着を歓迎してくれた。

玄関に入ると、左手にゆったりとした応接間が見え、「うわっ、広いな。まるで英国で泊まった民宿みたいだ」と内心思う。私のウサギ小屋はとこ狭しと絵、写真、標本、書籍、ビデオテープ、ファイルが密集し、壁のスキ間も見えない程だが、このように白く広い壁に上品な日本的な額が掛かった空間を見ていると、立ち振る舞いまで変わってくるような感じだ。

私は奥に案内され、台所と食堂と居間がひと続きになった大きな部屋の中央のテーブルで、岡村氏と向き合いながら、とりあえず休息をとった。

学校が夏休みに入っているようで、息子さんと娘さんは

居間でテレビを見ていた。息子さんは、高校を卒業し今年から大学に進学とのこと。娘さんは中学2年生。気さくで知的な奥様の対応に、私は旅の緊張からいっぺんに解放されて楽になった。

まずは日本から持ってきた資料などを渡す。スーツケースは衣類を残して空になった。しかし、帰りは買い漁った書籍で重量物に変化することになる。

岡村氏から、これからのスケジュールについて説明を受ける。航空券の手配から日程まで、すべて岡村氏におまかせした。

私が逗留する寝室に案内され、窓の開け方やブラインドの調節の仕方について説明を受ける。荷物を置き、夕食を待つ間、岡村氏と思い出話や、旧知達の消息、30年前の続きとしての現状分析などを語り合った。

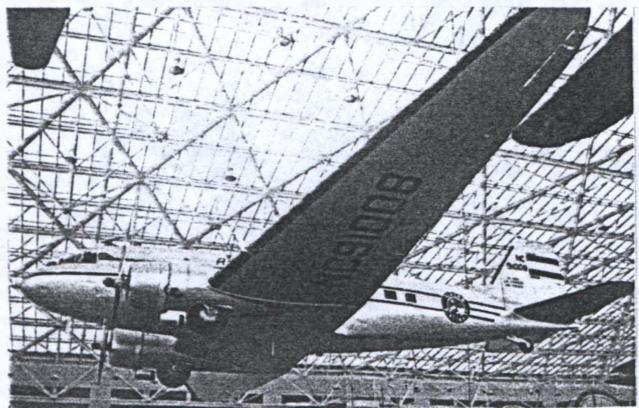
我々は空飛ぶ円盤とCBAが取り持つ縁で、同じような世界観、宇宙観を持つに至った。しかし、その内容は、現在のUFO界とは相容れないものもある。なぜなら、世間の風潮はUFO問題を心霊・オカルト現象の一種として捉える意識が支配的であり、「UFO墜落」「遺体回収」「誘拐体験」「精神目撃」「米空軍とETの密約」「ET技術の極秘利用」といった、我々から見れば「錯誤」「曲解」「精神疾患」「邪道」「捏造」の要素がそれに拍車をかけている。

我々が過去40年前から世間に向けて公報してきた「UFO目撃」「UFO写真」「UFO遭遇事件」「UFO飛行の意味」「UFOの記録」「UFOの歴史」「UFO知性の探求」「古代宇宙来訪伝説の探求」といったオーソドックスな、本来なら全地球の青少年の学ぶ教科書で学ぶことが出来、かつ有益に世界平和と正常な文明進歩に活用できる「知識」としてのUFO情報は、世間に流通する大半のUFO情報と対立する部分が多い。いずれのUFO情報が世界をリードするか、その力関係は、多勢に無勢という物理的な図式しか成り立たないのか。プラスαとしての「現実のUFO」からの介入が望まれるところである。

■Museum of Flight

6月23日の早い時間に我々は「飛行博物館」に着いた。駐車場から周囲を見渡すと、いくつかの機体が野外展示されていた。それらは、後で見ることとして、我々は館内に入った。入場料を払うと共に渡されたステッカーを胸に張り付ける。海外の航空博物館を見学するのは、これで3度目になる。

野外からの採光が天井からそそぐ広い空間に、所狭しと世界の有名機体が展示されている。ミグ、F4ファントム、F-86、巨大な黒い機体はSR-71という戦略偵察機。天井を見ると、あのダグラスDC-3がそのまま吊り下がっ



■世界中の空を最も長い期間飛行したといわれるDC-3。

ている。四角い窓、双発のエンジンカバーにめり込むような車輪。「DC-3のスミス機長とスチュワーデスが9個の円盤を目撃しました…」という懐かしいナレーションが聞こえてきそうだ。

私は見学者用のサービスに設置された戦闘機の操縦席に座って、岡村氏に記念写真を撮ってもらった。宇宙飛行士に関する様々な思い出の資料を展示した暗い部屋には、宇宙空間を宇宙遊泳するシミュレーションを操縦し、採点を受けるコーナーもあった。

岡村氏の説明によると、最新鋭のジェット旅客機ボーイング777は設計図なしで造られた機体だそうである。すべてコンピューターから直接部品の生産工程に直結しているようだ。

古い時代の飛行機工場を垣間みる、実際の道具や木製のプロペラ、機体の骨組みに布を張る時代に活躍する女性の工具の写真、など米国における飛行機の歴史がよくわかった。

宇宙関係の展示場には、ロケットの歴史、ジェミニ、アポロのレプリカが見られた。私は特にアポロ司令船のレプリカに注目した。ハッチの開いたその部分である。実はこのハッチの扉は私にとってある出来事につながっている。というのは、ある有名な研究家が著わした書物の口絵に、「UFOの窓から見えるエイリアンの顔か?」というイラスト付の解説があったのだが、私はその「窓」がアポロ司令船のハッチの扉の形であり、イラストに見られる周囲の形が、扉のある部分に一致していることを出版社に通知したのだ。

さて、月の石も見て、外に出た我々は、大統領専用機エアフォース1を一瞥し、B-29とB-47に近づいた。両者ともUFOに関係した機種であり、私はその前に立って岡村氏に記念写真を撮ってもらった。

帰国してから、妻がさっそく写真を検分してくれ、何か気になる像があるプリント数枚を私に教えてくれた。その中の一枚に、B-29の上方に写る三角状の像に私は興味を持った。

一応、そのネガをルーペで見てみた。たまに見られる現象液のムラによるシミや、フィルム自体の感光乳剤の粒子の不揃いによる色つきの丸、あるいはフィルムの一部が薄利した黒い像とは異なり、それはフィルムの像と同じものであった。私はこのネガをスーパーのDPEで、2Lサイズで焼き増しを頼んだが、最初は私の顔を良く出すために空は薄くなってしまった。そこで「人物の顔が黒くつぶれるのはかまわないから、空を焼き込んでくれ」と頼んだ。その写真が出来上がり、ルーペで見ると、軽飛行機が斜めに



■UFOの側面スタイルを思わせる目の意匠

なり、翼が太陽光線に反射して白い白線となって、機体が黒いシルエットになり、一見すると三角形に見えたことが分かった。

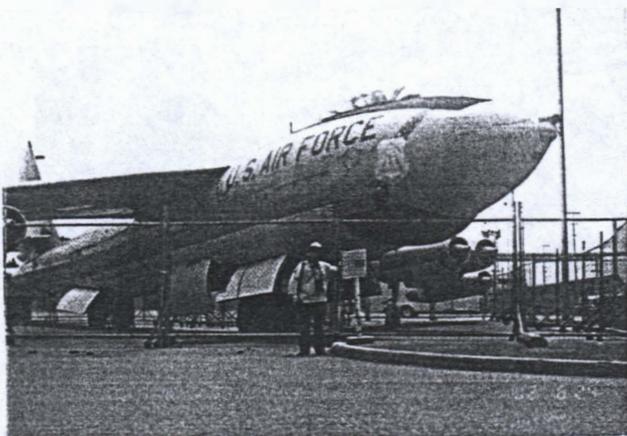
■SEATTLE ART MUSEUM

シアトルは一方通行と急な坂の多い町である。車を止める場所を捜して同じ道を何度か巡り、ようやくこれから出ようとする車に出会って、そのスペースに駐車できたりと、岡村氏と共に体験させてもらった。美術館もそうした町の一角にあった。そこは美術全般なので、我々は必要なネイティブアメリカンのフロアだけを見学した。

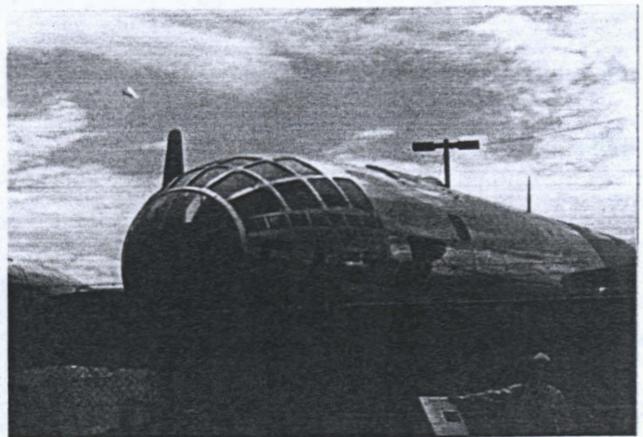
圧巻は巨大な2体のサンダーバードの木像であった。高さ5メートルはあるだろうか?また、多くの工芸品にみられる「目」の意匠に注目した。「これには円盤のツバもある」と岡村氏が指摘するように、その形は実に空飛ぶ円盤の側面に似ているのだ。「目の形はもともとそういうものだ」と言ってしまうればそれまでだが、我々は昔から、古代エジプトにおける「ホルスの目」と同様、太古より継承されてきた「神聖なる形」であることを重視してきた。それらの形が現在のUFOを思わせる、という点は世界共通といつて良いだろう。

我々現代人は未知なる飛行物体を「皿」に当てはめ、やがて自らの文明も到達した「宇宙船」の概念に当てはめた。昔の人が、未知、というよりも、神話伝説にみられるように「恩恵をもたらした存在の形」として後世に伝えようとするならば、身の回りにある物の形、とりわけ動物の角や身体の一部にその形を当てはめて継承しようとするのは、ごく自然の成り行きと思う。

さて、この博物館の土産売り場で、私は夢中になった。インディアン芸術や岩絵に類した写真をちりばめた書籍が多数あり「どれもこれも欲しいが、特にこれといって重要なものもなく、40ドルと高額だし、どうしよう



■かつてはSACの一線で活躍したB-47



■B-29のそばに軽飛行機が写ったもの。



■アーガシイ遊覧船に乗る前の記念写真

か」と思っているうちに、ここを出る時間がきてしまった。

■ARGOSY CRUISES

Blake Island State Park Tillicum Village

港に近い日本食のレストランで、やや遅い昼食をとった我々は、午後4時すぎ、Pier55という船着き場からブレイク島に渡る船に乗る大勢の人々の列に並んだ。

その島はシアトルの街名の由来であるネイティブ・インディアンのチーフ、シアルス誕生の地ティリカム・ヴィレッジのある島である。その島で、西海岸北西部の海洋インディアンの伝説に基づいたショーを鑑賞する、と岡村氏から説明を受けた。なかなか面白そうである。

島までは約45分。船は小型の遊覧船、といった感じで、2階にわかれた船室の1階の座席に座った。座席といっても、簡単な椅子が並べられているだけで、自由に位置を動かすことも出来る。我々は周囲の景色に応じて、船の反対側の席に移ったり、また戻ったりして周囲に展開する珍しい光景を楽しんだ。船が港を離れるとシアトルの街並みが一望に見渡せる。ひときわ目立つのは、あの円盤型の「スペース・ニードル」という高さ184mのタワー



■シアトルのシンボル「スペースニードル」



■ブレイク島における民族ショー

だ。巨大なタンカーがゆっくりと移動する後ろから純白の豪華客船が進んでくる。反対側の港には、最新型の軍用艦が停泊している。クレーンがズラツと並んでいる。コンテナ船の荷降ろしのためだ。

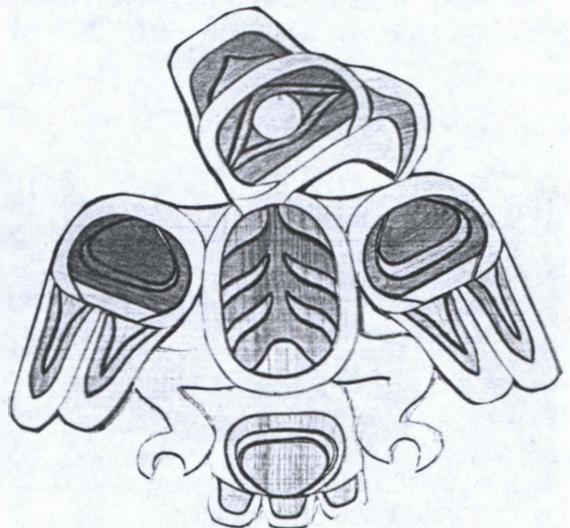
コンテナ船が活躍する以前、私は仲間と共に、資金稼ぎの手段として、「荷役」という貨物船から荷物を陸に上げる作業を横浜の港でやったことがある。いつも「死亡事故をなくそう」とはり紙があった。海に転落して死亡した話や船倉に落下して死亡する話を聞いた。仲間の一人も落下してきた木材が当たって足を骨折した。この危険な仕事を一時、岡村氏を誘い一緒にやったことを、岡村氏との対話の中で思い出した。

周囲に日本語の分かる人がいなかったの、私は誰にも聞かれないこの機会に、かなり込み入った話をして、とりあえずお互いの歴史の空白を埋めて安堵した。

島が見えてきた。木造建築の真ん中に大きなシンボルが見え、トーテムポールが立ち並んでいる。スロープを上って建物に近づく途中で、発砲スチロールの碗に入ったアサリのスープを渡される。それを持って建物に入り、窓から海を眺めながらアサリスープをいただく。アサリは大きく味は良い。

建物の奥に行くと、簡素な劇場といった広い部屋で、すでに大勢の観光客が食事の席についていた。我々は舞台から最後部の場所で席に着き、食事を始めた。飲み物も食事も我々日本人に合った味である。

やがて舞台上で劇が始まった。舞台の左上に、太陽か月を表現した丸い照明があった。照明というより日本の提灯に似た祭りの道具を思わせた。「ロング ロング アゴー」といったナレーションも流れてきたが、私には聞き取るこ



とが出来ない。しかし、見ているだけで何となくわかるような気がした。私は一段上がった席に移ってビデオカメラを回した。残り時間を見ながら撮影。テープがゼロになったので、暗闇でテープの交換をした。これは初めての経験だった。

劇の最後に、大きな乗り物のような物体が、静かに上へと引き上げられた。サンダーバードのような、空中の乗り物の離陸に思えた。

船が島を離れてしばらくしてから「従業員の一人を島に残してしまった」とのアナウンスが流れて、船は海上で方向転換し、島に向かった。船は再び接岸し、その従業員の若い女性を乗せてから再び島を離れた。客達は笑いと拍手喝采でこの一部始終を見守った。

我々が岡村氏宅に帰ったのは午後の9時頃であったが、空はまだ明るかった。シアトルの夏は英国同様に昼の明るさが8時過ぎまで残るのである。逆に冬は昼間が短く、たちまち夜になるとの事であった。また、家の中も外も極めてホコリの少ない状態で、奥様に聞くとその通りとのことであった。米国と日本の違いについては、様々に話題が及んだが、特に教育面に関しては、日本の授業時間削減や学習内容の削減が、世界の趨勢と逆行し、国全体のレベルダウンを招くことは明白だった。

教育者である奥様から語られる様々な実情の事柄は、非常に参考になった。

■Mt. Rainier

6月24日の朝を迎えた。ベッドから窓の外を見ると一点の雲もない快晴である。身支度を整え、私はスーツケースから、この日のために用意したゴム製の円盤モデルと金色のISSバッヂをくりつけたCBA旗(太陽円盤旗)を取り出す。旗をくりつけ、二つに折曲げた金属の棒を伸ばし、手に持つ。そして、レーニア山に奉納する「地球外知性痕跡探索」を持ち、撮影器材のショルダーバッグを持って、食堂に降り朝食をとった。

岡村氏は地図を広げながら「レーニア山には、サンライズとパラダイスという二つの展望地があります。」と各々の特徴を説明。「どっちに行きたいですか?」と聞いたので「出来たら両方とも行ってみたい」と希望を述べた。「それでは最初にサンライズ、次にパラダイスに行きましょう」ということになった。

彼はカメラ、携帯電話、奥様が用意してくれた昼食を収めたクーラーボックスを持ってガレージへ。今日は今までの乗用車ではなく、4WDに荷物を積み込んだ。

午前9時30分出発。外気温は21度。往復約420kmの行程だ。405→167→410と高速道路を進む。岡村氏がメー



■パラダイスの駐車場に駐車する4WD。

ルで知らせてくれたように、郊外の走行は日差しが強く、サングラスなしではいられない。私は安物だが眼鏡の上からスッポリ収まるサングラスを持ってきた。見ると、水平方向が澄んだ空の彼方に、白いレーニア山が見えていた。さつそくビデオ、カメラで撮影を始めるが、このような場合に威力を発揮するフィルターを忘れてきた。自分の未熟さ、もう一步の踏み込みの甘さを痛感する。

道路が山に挟まれてくると、そのスケールの大きさに目を見張った。広大な山の斜面がすべて杉の巨木で埋め尽くされている。壮大な眺めである。

「ワシントン州の山では、例のビッグフットが目撃されるんですよ」と岡村氏。確かに、ビッグフットのような生物が生活できそうな深い森林地帯だ。

途中、山の中の売店で休憩。清涼飲料とガムを買う。車に同乗していると、眠気を催すことがあり、ガムはそのためのも。道路はホワイトリバーという清流に沿っている。時折右手に美しい川の流れが見渡せた。また時折分厚い残雪のかたまりがあった。その残雪の下から岩肌を濡らす清流の源が流れていた。

やがて行く手に二股の分岐点が見えた。右手の道にSunriseの標識。道を進むと道の真ん中にゲートの小屋があり、年配の女性がいた。料金を払い、地図をもらう。ところが、「サンライズはクローズされている」という。岡村氏が「どうしてか?」と聞くと「まだシーズンではない」とのこと。「えっ、もう夏なのに」とあきれぬ岡村氏。「行けるとこまで行ってみましょう。そこからレーニア山が見えるかも知れないし」と車はサンライズに向かう。とたんに道が悪くなり揺れがきた。しばらく行くと「通行止め」の標識があり、もう先には進めない。山に囲まれていて見晴らしも悪いので、我々は引き返した。さきほどもらった地図の一部が切り抜かれていたので、ゲートの女性から新しい地図をもらう。

こんどはパラダイスだ。「地図の地名をよく見ていて下さい。脇道を見逃すかも知れないから」と言われ、改めて地図に見入る。パラダイスには410を5kmほど進んで123に入り、18km先で右に直角に折れる道を進む。そこにStevens Canyon Entranceの地名があった。

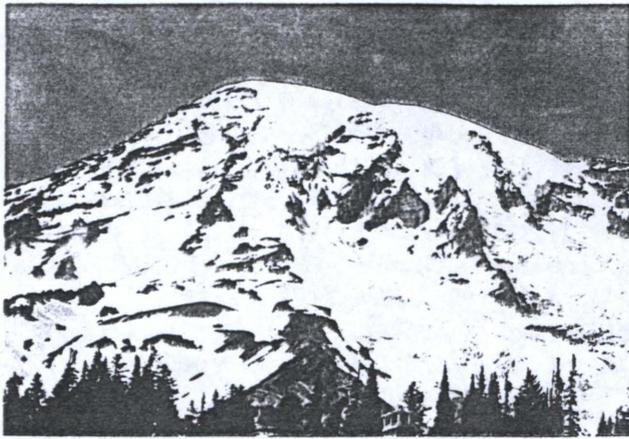
次第に大きく迫るレーニア山の姿は、道路の前方に、あるいは左手に、ときには右手に見え隠れしする。車は曲がりくねった道路を進む。地図を見るともう標高1400m以上の高さだ。時折、気圧の変化で周囲の音が聞こえにくくなる。ツバを飲み込むと再び周囲の音が聞こえてくる。その繰り返しだ。

行く手に開けた土地と建物の建つ場所が見えた。駐車場には、すでに数台の車が見える。ここが「Paradise」だ。

その名の通り、MOUNT RAINIER(現地名Tacoma)という、古代インディアンにとっての「天国」である。インディアンの伝説によると、大洪水がこの地を襲ったとき、神はこの山の上にかかる雲に向かって矢を射ると言ったという。そして矢を雲に向けて何回も射ると、矢は次々と繋がって、一本のロープとなったという。彼らはそのロープを伝わって雲の中へと非難したというのだ。

その出来事から1000年以上の歳月が流れた1947年6月24日に、ネイティブアメリカンにとって伝統ある山の上空に、20世紀の謎、「空飛ぶ円盤」が目撃された。ケネス・アーノルドはその目撃証人となった訳だ。

時刻が正午を過ぎていたので、我々は弁当の入った容器を持って昼食をとる場所を探して、残雪の上を歩いた。私は革靴なので、かかとで雪をたたくようにして踏みしめ斜



■アップのレーニア山の写真は、この1枚だけ。

面を上がった。

木の根元の岩に我々は腰を下ろし、青空の中に輝くレーニア山を見上げつつ、奥様手作りのおにぎり3個づつをいただいた。

食事を終え、いったん車に戻って、旗とカメラ類を持って記念撮影をすべく、再び残雪の場所に向かう。岡村氏がビデオで撮影してくれる、とのことで、私が旗を持って、ときおり振りながらレーニア山を見つめて登る姿を撮影してもらった。

残雪の小山に何のために誰が差したのかわからないが、黄色いパイプが突き刺してあった。私はこのパイプに旗の棒を差し込んでみた。すると途中で止まり、旗はちょうど良い高さではためた。

まず私一人が旗を広げたと岡村氏に撮ってもらい、次に青年が近づいてきたので、彼にカメラを渡し、二人で旗を広げた写真を撮ってもらった。

次に、「地球外知性痕跡探索」を持って、我々が食事をしたそばにある木の根元の土を手で掘り、空洞を作って封筒に入れた「地球外知性痕跡探索」を入れて土を元通りにし、岡村氏が木の葉などでカムフラージュして、一応の私なりの「Ceremony」は済んだ。

ピジターセンターで土産を少々買い、車に戻ると、私のせっかちなクセで、用事が済んだから帰りたくなった。それを岡村氏に言う「えっ、3時までいるんじゃないんですか」と言われた。確かにそうであった。

私は時折腕時計に目をやりながら空を眺めた。腕時計は2本はめ、一つは現地時間、一つは日本時間を示していた。午後3時になったとき、軽飛行機が飛来して山の周辺を旋回し、そして去った。これを見て、「アーノルド事件の何らかの行事のひとつではないか?」と思った。

岡村氏は私に言った。「何時まで観測しますか?」これを聞いて私はハッとした。「そうだった、今日はこの山にUFOを迎えるべき日なのだ」と。実際のところ、現地に行き着くことばかりで頭が一杯で、UFOをこの山で観測するという気持ちの余裕がなかった。その証拠に、この重大な刻限にスチルカメラ、ビデオカメラ、ともに300mmもテレコンバージョンレンズも装着せずに空を見上げていた。私はこの失態を胸の中に押し込みながら「3時30分までいようか」と平然と言ったと思う。

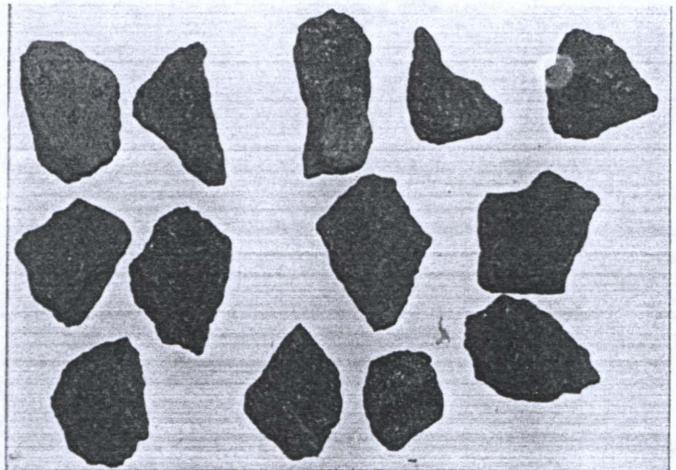
レーニア山の上には絶えず雲が流れて、ときおり山頂を隠し、ふたたび現わしたりと、空中にかかる幕のような役割を果たしていた。ふと見ると、山頂付近を黒いものが動いている。大きな鳥であった。3羽ほど認められた。「あんな高いところを鳥が飛んでいる」と岡村氏に言う「そ



■CBA旗を手に残雪の上に立つ岡村氏と天宮。

れほど高くはないんじゃないかな」と言った。確かに、下から山を背景に見ているので、見かけ上、山の近くに見えるが、山自体は巨大であり、鳥は小さいのだから、ずっと低空の手前になければ見えないわけだ。

「レーニア山の石を拾って行くとかはしないんですか?」と岡村氏が私に言った。そういえば、デカン高原では溶けた岩のカケラを、シルベリーヒルでは石を、エブペリーでは宝石のような丸石を、それぞれ持って帰った私である。聖なる山の石も、集めて持ち帰らなくてはならない。あわてて石を拾って彼に見せると、「もっと良い石がありますよ」と、それを捨てさせ、やや下った別の場所に案内してくれた。確かにそこは石ころというより、レーニア山の岩のかけらが採掘できる場所で、私は何となく13個数えてタオルに包み、それを岡村に見せた。「13個なんですね」と彼は確認した。

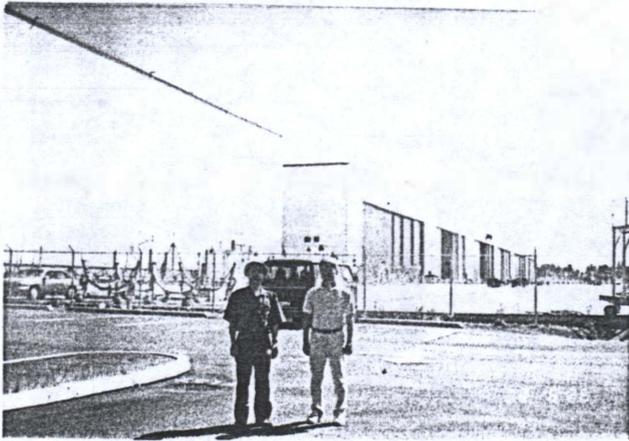


■レーニア山から持ち帰った13個の石

■ Boeing Factory Tours

6月25日は、岡村氏が予約してくれたボーイング工場見学である。航空機メーカー、ボーイング社は従業員220000人。第二次世界大戦中は日本にも多数飛来したあの重爆撃機B-29を大量生産し、現在はジャンボ旅客機B-747だけでも年に40機を生産している。世界の空を飛ぶ旅客機の4機に3機はボーイングである。創業者ウィリアム・ボーイングが1916年に1号機を造ったとき、従業員は7人だった。機体は木製の骨組みに布が張られて、翼は洗濯屋のお針子さんが造ったという。

ボーイング工場は各地にあるが、我々が見学するのはシアトルの北、エヴェレットの街にあり、ジャンボジェット機が組み立てられる工場である。



■ボーイング工場の巨大な建物と共に

われわれは朝9時前に工場の駐車場に到着した。四角くて長い巨大な建物が見える。そのドアも巨大だ。組み立てられた飛行機が出るドアであるから当然だが。

見学者の待合室には、すでに10数人の老若男女が時間待ちをしていた。室内にはボーイング社の歴史を説明する展示物や写真パネルがあり、それを見ながら時間をつぶせる。

見学開始の時刻となり、我々はスクリーンのある教室のような部屋に集められた。体格の良い若い女性が早口でまくしたてる。岡村氏の通訳によると、この見学ツアーは、広い工場内を上がったり下がったりしながら長い距離を歩くので、幼児や年寄り、身体の悪い人は参加できない、とか、終わるまでトイレはない、という内容とのこと。また、撮影は厳禁で、とにかく手ぶらで入らなくてはならない。

見学者は全部で2~30人といったところだろうか。子供もいる。日本人もよく来るそうだが、今日は見当たらない。我々は階段を降り、地下を貫くまっすぐで長い通路を早足で歩く。

我々は大きなエレベーターに乗って地下から上に上がる。見学者通路を進むと、巨大な空間を見下ろす場所きた。この空間でジャンボ機が組み立てられるのだ。天井にはクレーンのレールが何本も走っている。ちょっと数えただけでも30を越えた。旅客機の部品はすべてこのクレーンで運ばれ、繋げられ、形が出来ていく訳だ。従業員は工場内の移動に自転車を使っている、との説明で、確かに見下ろすと自転車で乗った男性が見えた。真下には翼を置く平面が見える。その左手には、半完成の頭部。どこかで鋸を打つ音が響いているが、どこでやっているのか判らない。

一見して大きな動きはなく、クレーンで吊り上げられた部品とか部分とかも見えず、下を歩く男女は何やら話ながら、ゆったりと歩いている。

見学者通路を進むと、ジャンボジェット機の断面模型が展示してあった。実物大である。大きい。ところが外装の金属の厚みを見て驚いた。たった2ミリほどである。こんな薄い壁で「生」と「死」が仕切られているのか、と不安になった。ちなみに客室の床の厚みは1センチほど。飛行機の脆弱性というものを感じたが、乗ったら最後、命を預けるのが飛行機だ、という実感を更に強くした。

エレベーターに乗り、再び地下の長い通路を通過して、我々はバスで高速道路の向こう側の敷地に向かった。そこは飛行機の駐車場みたいなところで、世界各国の航空会社の塗装をして、これから「顧客」に納品する前の状態がズラッと並んでいる。

工場で組み立てた飛行機をこっこの工場に移すのは、真

夜中にやるとのこと。つまり高速道路を機体が横断するので、昼間の時間だとドライバーが気をとられて事故に繋がる恐れがあるからだ、という。

バスは待合室の前で止まり、見学ツアーは終了した。見学者用の土産売り場の建物があったので、しばらく店内を見て歩き、ボーイング747と777の簡単なソリッドモデルと、美しい宇宙の写真集を4冊買った。ボーイング工場を背景に記念撮影をしようということになり、私は以前、英国に行ったときにH氏からもらったカメラ固定具を塀にはさみ、タイマーで二人並んだ写真を撮った。

■UFO talks

ボーイング工場見学のあとは、岡村氏の友人のUFO研究者ロバート・ダベル氏と会談するため、約束の場所へ向かう。

我々はとある街の一角、駐車場付きのレストランが立ち並ぶ場所に来た。一軒目の駐車場を巡り、2軒目に…

「あっ、これじゃないかな」岡村氏は一台のワゴン車の隣に車を停めた。車のそばに一人の男性がいた。ロバート氏であった。

私はロバート氏と初対面の挨拶を交した後、3人でレストランに入った。そこは、ちょっと変わった店であった。野菜や肉類の食材が何種類も並んだところから、自分の好きな食材を皿に取って、それを大きな丸い鉄板の上でいためてもらうというもの。料理人は東洋系で、直径7、80センチはあろうかと思われる大きな丸い鉄板の上に次々と3人分の食材を載せ、30センチ以上はある幅広い大きな包丁で食材をタンタンと激しく叩くように細かくし、あっという間にでき上がり。

ロバート氏は私の分を支払ってくれた。「ありがとう」と礼を言う。彼の存在と活動の内容については、岡村氏からのメールで度々知らせてもらっているが、読者にもっとよく知ってもらうために、彼から岡村氏を通じて2000年10月10日に受け取ったメッセージを紹介する。

「私のUFOに対する探求は、どのような理由で彼らは地球に来ているのか、という基本的な問いかけから発しています。その回答を求めて、今までに多くの資料を見てきました。その中にはタカシ(莞)が示した事も含まれています。それらは古代の歴史を見ても分かるおと、彼らが遥か昔から我々と共にあったことは明らかです。古代史を知り学ぶ上で、タカシは多くの資料とその見方、考え方を私に示してくれました。

私は当初、近代になってからの戦争(第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争)と、その間のUFO目撃事件を調べようとしたのですが、多量の軍事関係目撃資料の存在とその内容を知るに及び、多くのUFO事件は核開発との関係を表しており、初めに、この問題を独立させて調べるべきものと考えました。又、その後に戦時中のUFO事件を究明したいと考えています。核とUFOの問題は私を魅了させずにはおきません。UFOが世界の核の脅威から我々を守ろうとしているとの理解に至りました。私は、この事実を広く伝えるために書籍の発行かインターネット上に発表することを考えています。現在、その為の資料収集、究明に努力しております。(中略)

今までに、私に資料をお送り頂いたことにたいしてお礼を申し上げます。これらの資料は貴重さ、重要性において最高のレベルのもので、貴殿は、UFOについて、私よりも遥かに良く理解しておられると考えております。私の研究も貴殿の水準に達することを願うものです。



■ロバート氏を囲み、UFOの話をする。

近い将来、書籍がインターネットの為の概略のストーリー見本をお送りしたいと考えています。また将来、貴殿と共同の研究活動を行えることを希望しております。

Robert Duvall

このメッセージにみられるように、彼はUFO情報の最も核心部分と目される核兵器との関連を重視している。かつて日本においてはCBAが世間に向けてアピールした分野である。考えてみれば、将来の地球世界の運命を左右する核兵器の存在は、依然として脅威であり、当然ながらそれは一人地球だけの問題ではない。宇宙から見れば、地球は大量の破壊兵器を抱えている天体なのだ。我々はその現実をもっと認識する必要があるだろう。

さて、ロバート氏の紹介を続けよう。私は「日本の読者にあなたを紹介したい」と、「年齢は?身長は?家族は?」とぶしつけな質問をしてしまったが、彼はにこやかに「44才、6フィート(180cm)、妻と二人の娘、猫2匹、犬一匹」と答えてくれた。私の質問で聞き取りにくい部分を岡村氏が補ってくれたとき「周囲のノイズで聞き取れなかった。すまない」と言ってくれた。実際、例の食材を叩く包丁の音が店内に響いていた。しかし、静かで周囲に会話が聞こえる場所より、こういった場所のほうが安心ではある。

私がシアトルに来る前に、岡村氏よりある出来事の2点の事実関係についての問い合わせがきていた。現在その一点については、古本を購入して調べている。

もう一点はアラモゴルドにおける世界最初の原爆実験に関する事で、私の旧知から昔、『破滅の道程』という本に載っていた、として聞かされてはいたのだが、記憶のみでコピーもなく、とりあえず「UFOLOGY資料」にその経過を公表した。

この事に話が及んだ時、ロバート氏は「昨夜、偶然それを見つけた」といって、その内容を教えてくれた。それはまさに私が昔、旧知から聞かされた内容であった。私はこの偶然に驚いた。

彼の親戚には、ベトナム戦争時、例の「非武装地帯に現われた謎のヘリコプター(1973年10月16日、米空軍参謀総長ジョージ・S・ブラウン将軍によって『あれはUFOと呼ばれなかった。敵軍のヘリコプターと呼ばれたのだ』と言われたもの)の海軍レーダー係官としての目撃者がいたとのこと。

岡村氏が「キヨシに何か聞きことはあるか?」と聞いたとき、彼はしばらく考えて答えた。「あなたの水準に近づきたい」と。こんな嬉しい言葉を聞けるのは、岡村氏が私



■OUC乾氏提供の土偶がここでも活躍。

のことを詳しく彼に説明しているからだと思った。

短い時間ではあったが、ロバート氏の真摯な態度と、ひたむきさに感動しつつ、私は再び会えることを念じつつ別れた。我々は、ロバート氏との会談のあと、本屋に立ち寄った。私はそこで小さなスーツケースが「重量物」として空港で足止めの原因を作るほどの書籍を買い込んだ。

■岡村宅での帰国前夜

つい数年前は、「あまり発展も望めないし、体力的能力的に大変だからTHE UFO RESEARCHERの発行はそろそろ終止符を打とう。」と思い、それを近隣の人にもらした事もあった。

しかし、偶然というか、必然と言うべきか、私を休ませてくれない見えざる手は、再び私に仕事を与え、方向性と多くの可能性をもたらした。

「今夜は庭でバーベキューをします。準備する間、ここで見て下さい。」と言われ、わたしは、家族が協力して庭にバーベキューの道具やテーブル、椅子を並べる様子を家の中から見ていた。

家の外は夜になっても明るいこと、ほとんど虫がいないような感じ。(いることはいるが、日本の場合と異なる。シアトルの緯度は北海道より北である)そしてホコリがないこと。(風で砂埃が飛んでくるということがない)、何よりも気温が寒くもなく、暑くもなく、適温であることなどから、非常に快適である。そんな環境で、ご馳走を食べるのだから幸せの境地である。ただし、アルコールはない。

息子さんの友達も途中から参加して、彼らのバイリンガルぶりを拝見させて戴いた。まだたくさん書きたいことはあるが、この辺で紀行文を終わらせていただく。

編者室より:

今回の渡米によって和文英訳の協力者が得られ、編者の紀行文と講演が英文になった。世界へ向けての本誌が理想に近づいたことを感謝したい。「日本UFOシンポジウム2002」の記事は、誌面の関係で編者の講演紹介だけとなった。他の講演者の内容や録画は、とりあえず主催者に送る予定である。また、東京の郡聡氏から多数のUFO写真をご提供戴いた。その一部を裏表紙で紹介したが、同氏の貴重なUFO体験は次号に掲載する。シアトル紀行で撮影した機上からの映像を希望の方には、その部分のみダビングして提供する。

情報のやりとりや連絡が、パソコンを通じて行われる頻度が高まり、いつも気を配ってないと、せっかく提供された資料をパソコンの中に埋没させることもあり、メールの保存処理とプリントの整理が重要な作業になった。しかし、編者のパソコン室はクーラーがないため、7月は明け方の涼しい時間を作業に当てた日が多い。インクジェットのパrintは、したたり落ちる汗で汚れる欠点がある。30年の空白を経て、日米合作の研究誌作りがスタートした。(7.28)

Until standing on Mt. Rainier on June 24, 2002 after meeting with my comrade for the first time in 30 years.

Foreword

June 24, 1947, Kenneth Arnold witnessed nine mysterious objects flying at high speeds while piloting a plane in the skies above Mt. Rainier. They were named "flying saucers" and the word spread throughout the world. People all around the world claimed seeing similar objects, and scientists and the Air Force gathered the witness reports. National and civilian research organizations were formed, and soldiers, scientists, and even politicians took part in solving the UFO issue. June 24 came to be known as the International Flying Saucer Day, and events such as expositions and symposiums were conducted in countries throughout the world in commemoration. One of those events is the "UFO Observation fair." It is where a large number of people gather in one place in attempts of observing the sky and finding UFOs.

In 1960, I joined the Japanese civilian UFO research group, the CBA. From the evening of Saturday June 23, 1962 to the morning of the 24th, the CBA conducted a UFO observation event in commemoration of the 15th anniversary of International Flying Saucer Day on Tsukuba Mountain of the Ibaraki prefecture. I was one of the more than one hundred people who climbed the mountain and gazed at the heavens.

It has been 55 years since 1947. 40 years since the first International Flying Saucer Day I participated in. Two years ago in the summer, I learned that my old research partner was living in the city of Seattle in the United States. His name is Takashi Okamura. He lived in a city where Mt. Rainier was visible. In our exchanges of email messages, we promised to someday stand on Mt. Rainier together. Eventually, that day came, and on June 24, 2002, we stood on Mt. Rainier together as we gazed at the heavens. Here, I will write my account of the course of events.

Impossible! Maybe, But Seein' Is Believin', Says Flyer

Kenneth Arnold, with the fire control at Boise and who was flying in southern Washington yesterday afternoon in search of a missing marine plane, stopped here en route to Boise today with an unusual story—which he doesn't expect people to believe but which he declared was true. He said he sighted nine saucer-like aircraft flying in formation at 3 p. m. yesterday, extremely bright—as if they were nickel-plated—and flying at an immense rate of speed. He estimated they were at an altitude between 9,500 and 10,000 feet and clocked them from Mt. Rainier to Mt. Adams, arriving at the amazing speed of about 1200 miles an hour. "It seemed impossible," he said, "but there it is—I must believe my eyes."

He landed at Yakima some what later and inquired there, but learned nothing. Talking about it to a man from Ukiah in Pendleton this morning whose name he did not get, he was amazed to learn that the man had sighted the same aerial objects yesterday afternoon from the mountains in the Ukiah section!

He said that in flight they appeared to weave in an out in formation.

First report of Arnold's sighting
Pendleton EAST OREGONIAN, 25 June 1947, page 1

30 years ago

"I must finish what I decided to do"...with this solemn conviction, I am writing this after completing a planned trip which I thought would be quite difficult for me.

Ever since I managed to contact my old friend Takashi Okamura during the August of 2000, we have exchanged opinions and information via email.

He and I were members of the Tokyo division of CBA, a Japanese civilian UFO research organization, and we were also involved in activities as members in a Tokyo student circle.

CBA is an abbreviation for Cosmic Brothers Association. This organization was formed in the August of 1957. The founder, Yusuke Matsumura, had a father who contributed to the Japanese aviation world, and Yusuke himself helped his father as a Japanese correspondent in the Swiss aviation magazine, "INTERAVIA". In his work, he obtained information regarding UFOs from around the world, and formed the first Japanese UFO research organization, the Flying Saucer Research Group in Japan.

The CBA in the 1960s possessed the largest membership in Japan, and actively conducted various observation and exhibition events all throughout the country from Hokkaido to Kyushu.

Takashi and I shared the task of editing and printing the youth-oriented CBA bulletin, "Flying Saucer Digest". If I were to come down with an illness, Takashi would take over the printing process of the bulletin for me. Also, he participated over a long period in the construction of the Hayopra Park in the town of Biratori, located in the Hidaka region of the Hokkaido prefecture. This park was dedicated to the culture god Okikurumi-Kamui of the native Hokkaido people, the Ainu, as a monument to stand for the gratitude towards the cultivation and guidance it has blessed the human race with.

At the time, my base of operations was in the Tabata district located near the center of Tokyo, where I spent my childhood. Currently, my mother in her 80's lives there alone as the owner of a five-story condominium.

Around 1967, when I departed from my position in the CBA headquarters, Takashi invited me to join the organization which he formed; the Associated College UFO Research Organization. Around that time, he was involved in the exposition of the UFO issue using filmstrips. He was especially focused on analyzing situations where UFOs appeared amidst military operations and exhibited some sort of influence over control systems of and/or of offensive firearms itself of the military. He instructed and guided many college students, and his analysis work was presented at the campus festival.

He regarded the UFO issue with great significance in the history of the human race, and was attempting to make the significance of the visitation of extraterrestrials to this planet known using examples in history where higher intelligence was involved in the making of history. He acquired the fundamental knowledge regarding this issue during his time with the CBA. To be more precise, we were following in the steps of Yusuke Matsumura's theory, and attempted to develop the theory further while verifying and reinforcing it. During our undertaking, Takashi maintained that the development of the theory should proceed logically and be founded on hard evidence.

Also, Takashi and I obtained many ancient historical data from various sources, such as the legends and petroglyphs of ancient Native Americans and we created data files with the gathered information. It was at this time that my house in Tabata functioned as our base of activities.

We had planned to produce a large-scale filmstrip presentation of the relationship between the ancient space visitors and the history of mankind. We went through countless resources and obtained the necessary photographs for our presentation. In order to reproduce the resources photographs completely using reversal color film, many technical skills and equipments were required. Although I did not possess the expertise at the time, Takashi had acquired this skill while producing film presentations in the Associated College UFO Research Organization. Therefore, I was able to learn this skill from Takashi as we undertook the process of producing the filmstrips together. Thanks to that, I was able to produce the photographs featured on "UFO News" (a CBA publication) in 1974 by myself, since at this time, Takashi had already moved to Canada.

During the summer of 1970, Takashi and I visited the various sacred grounds and ancient ruins located throughout the Wakayama and Nara prefectures using his car. At this time, the Toumei Highway had opened, and it was possible to travel from Tokyo to the Kansai region in Western Japan without spending the night somewhere in-between. We took turns at the wheel. Immediately after we departed, it started to rain, and driving at 100 km/h on the wet road surface felt like traveling on a sheet of ice. Walking around in the Miwa mountain region, I mentioned to Takashi, "I'd like to live in a place like this." He replied, "This place feels fresh because we only visit occasionally." However, coincidentally, I currently live in the city of Tenri, from where Miwa Mountain is visible.

The Days before my Departure

During May of this month, I edited the January edition of "The UFO Researcher" while ill with bronchitis. The pages were copied in Osaka, and were bound in my house. On May 30, the last of them were shipped to their subscribers.

In June, the deadline for the UFO article I write every month in a magazine was nearing. I drew up a new project, and gathered resources and photographs pertaining to it. Thinking that I will be busy from the end of June into July, I finished two months worth of articles and sent it into the publisher.

On June 8, I had the day off from work. I went to the travel agency JTB, and applied for travel insurance. Also, I learned from Takashi how to read the airline ticket I had asked him to purchase for me and bought shuttle bus tickets to the Kansai International Airport at the same time.

Ten days after, I saw a strange light in the evening. At 9:30 in the evening on June 18, I left my house for the post office to deposit a number of letters and two issues of "The UFO Researcher". Normally, the trip takes only around a minute. While pedaling my bicycle, I was envisioning the reunion with Takashi. Then, I saw two stars appear side-by-side in the eastern sky in front of me. However, the left star was blinking rapidly and brightly. As I pedaled my bicycle slowly, I thought to myself, "Could this be an airplane?"

Eventually, the blinking star ascended, and it seemed as though it was coming towards me. Again, I thought to myself, "Could this really be an airplane?" The light was alone by itself, and lacked any other lights that should be on an airplane. Then, an identical blinking light appeared to the lower left. Including the non-blinking light, which was an actual star, the three lights formed a triangle in the sky.

Then, the triangle gradually became distorted, and the blinking lights approached overhead. Various hues of light such as red and blue radiated from them and blinked constantly, but I could not see any sort of landing lights (if it were a plane landing from the east) or standard flashers that should be on an airplane. I stopped my bicycle. Even though the lights were overhead now, they exhibited no change in appearance, and was still a blinking point of light. Suddenly, the light that appeared second accelerated, caught up to the first light, and flew off after passing under the first light. Even though the apparent velocity was greater than any plane flying at low altitude, it still appeared to be a blinking point of light.

Up until this day, I have never seen an incident where planes at the same altitude pass another. A difference in altitude can usually discerned from an observer on the ground, and orange or red flashers can be seen easily even from very high altitudes.

Immediately after, I saw a plane heading west. It appeared large, flying at a low altitude, and its lights made it easily distinguishable as an airplane. Its speed was also much slower than the previous two lights, which gave rise to the thought, "Then what

were those that I just saw?"

I looked hurriedly to the western sky, but the lights were not visible anymore. At the same time, I recalled an incident where I was on a train and witnessed two white UFOs approach and one passed another. At that time, I was thinking of the reunion with Kozo Kawai.

Also, the way it blinked rapidly reminded me of how a satellite-like object blinked rapidly when I observed it through a pair of binoculars.

The evening of the 18th was a clear night and there were no clouds. Just to be sure, on the following night around 9:30, I circled the region on my bicycle observing the sky, but there were no approaches by airplanes from the east.

I notified Takashi of this incident in an email message I sent to him. Then, I began work on the resource files I would take with me to the United States. The main file was putting together the back issues of "The UFO Researcher" from 1989 to 1994. The original copies were neglected for a long time, and many stains as well as pages peeling off were visible, so I photocopied these pages little by little at a local supermarket. Also I went to many stores within Tenri city, looking for ringed binders which to hold the pages. I was relieved to find just the necessary number of binders that could show the all the pages on two facing pages. There wasn't many days left until my departure for Seattle.

My biggest problem was at the transfer in Los Angeles. I learned about the procedures and the airport using guidebooks and the internet, and created a memo titled "Project Anti-Nuclear & Ceremony" where I wrote down my travel plans. This memo, which I kept in my pocket all throughout my stay and thus became quite wrinkled, contains all the planned times and actual times of events that took place. Just in case, I wrote down Takashi's home phone number at the end of the memo, but I had forgotten to take with me quarters necessary to make a call from public pay phones.

Getting lost as expected at the Los Angeles Airport

June 22, 11:30 AM, I placed my luggage on my wife's bicycle, and together, my wife and I left the house. As baggage, I had with me a shoulder bag that had my photography equipment and video camera in it, and a small suitcase that contained printed resources and my changes of clothes. I took a train from the local Zensai station at 11:47 to the Nara station, and rode a shuttle bus that left near the station at 1:05 to the airport. The bus arrived at the airport at 2:30, and I checked in at the Japan Airlines counter at 2:39. My suitcase was thoroughly inspected by the officials there, and with my own explanation of the contents, the baggage was given a tag that signified it was cleared.

3:01 PM, Departure procedures. After writing in information in a departure card, I was notified by the inspection personnel that Japanese citizens did not need to fill it out any more, and that entering the country only required a passport as well. Also, the airport usage fee of 2,650 yen was now included in my airfare as well and I did not need to pay it separately.

At 5:46, the Boeing 747-400 which was JAL Flight 60 took off. It was the beginning of ten hours until my arrival at Los Angeles, and it was a difficult time to endure in many respects.

Going back in time, I arrived at the Los Angeles airport at 11:19 AM on the same date. I was taken by surprise by the largeness and confusion of the place. From there, I rode a bus to the Tom Bradley Terminal. While waiting in line for inspection for entry in the country, a kind young man directed me to a line less crowded than my current one. In my guidebook, it was written that here I would explain with my words, so I practiced in my head, what I would say to the inspections agent in English. However, the official asked me in Japanese, "Sightseeing?" so I replied "yes", and that was the end of that. At the baggage pickup location, I searched for the display "JAL-60" and waited for my luggage to appear. The distinguishing feature, two small bear dolls that my wife had attached, eventually came into my view, so I took the suitcase and dragged it to the counter marked for re-confirmation of my airline ticket. When I showed my ticket there, the person directed me to place my luggage on a particular conveyor belt, and I remembered that for transfers, I was supposed to check my baggage again.

I asked for the location of the Alaskan Airlines terminal, and I was told to "take a left outside the building and go to building number 3". Outside, there was a huge crowd of people and taxis as though it were a scene on the city streets. I could not see where "Number 3" was, so I walked for quite a ways to the left before coming to a building marked with "Alaskan Airlines Cargo". The people there directed me to a place a little ways further. I finally arrived at the Alaskan Airlines counter, only to notice that I did not have my passport with me any more. Bewilderment and shock came to me at the same time, and my mind raced to recall where I had left it. I remembered I had left it at the Alaskan Airlines Cargo counter, and I hurriedly went to it to find my passport still sitting there as I had unwittingly left it. I took it as I smiled at the people behind the counter and returned to the line for Alaskan Airlines counter. Once back in the line, I started to sweat profusely, which seemed to attract the attention of the people surrounding me. They seemed to think, "Why is this man sweating so much?" When it was my turn, I was asked which seat I would prefer, so I asked for a window seat, hoping to get some aerial pictures of Mt. Rainier.

Wishing to quench my thirst, I bought a soft drink at a nearby store.

Witnessing a peculiar thing from the plane

Before boarding on the Alaskan Airlines flight, I had to go through two security checks. I was frisked, the contents of my bag searched, and the insides of each of my shoe were each searched as well. Right before boarding, I was even asked to demonstrate the operation of my video camera, and showed the official the contents of the tape on the viewfinder. Lastly, I was asked how to say "Thank you" in Japanese, and I replied "Arigato". It seemed as though they were verifying that I was a real Japanese. My efforts of going to an English conversation class for 6 months paid off at that moment.

Once I settled into my seat aboard flight 287 on an MD-80, I was suddenly overcome with sleepiness, and when I woke up, the plane was already in flight. Perhaps because my seat was located forwards of the main wings, I did not hear any loud noises like in the Boeing 747, but only a quiet hissing noise. The land surrounding Los Angeles seemed to be a barren desert, and the repetitive patterns of brown and gray made me feel like I was gazing down on the surface of Mars.

While fighting the occasional wave of fatigue, I gazed down upon the surface looking at the rare sights and cloud trails. When I looked down to the white clouds below, I saw what appeared to be a circular rainbow. It was moving in sync with the plane, so I thought that it was some form of shadow cast by the plane. It had many layers of concentric circles with a shadow at the center. Could this be the plane's shadow? I decided to photograph it anyways. Even if it were an optical phenomenon, it is still rare, and although it was probably not a UFO, there are UFOs that appear to be linked to a plane (such as the Russian TU-134A), so it has some worth in studying.

When I replayed the video footage I took of it, the center was yellow, followed by a bluish white, then red, blue, and the outermost ring was red. Rather, it would be more accurate to describe it as a reddish hue of color. When drawn on a diagram, there were 6 concentric rings. My wife, upon seeing the footage, commented that it looked like the sun symbol in the Hi no Oka tomb. When I saw the photographs of the currently faded wall paintings, there was a strong resemblance.

The light was visible even without a cloud behind it. It was without the concentric circles, but the orange-red light at the center was visible, and was visible through the viewfinder of my video camera as well. When the darker background passed behind it, the background appeared lighter, and went back to dark again after it had passed through the point, which meant that it must have existed as a point of

light in the space between the ground and I. When the tape was viewed in fast forward, the "existence" of the light became distinct. I thought to myself, "what kind of mechanism lies behind me being able to see such as thing?" but then, it vanished.

While photographing the scenery below once again, a beautiful snow-capped mountain came into view, and I zoomed in near the peak with my video camera. I found out about this fact later, but in the image, a cigar-shaped cloud that looked like a white bow, manifested beneath some gray clouds. At the time, I did not become aware of it appearing although I did notice it eventually. It appeared to be a very well-defined shape residing very close to the peaks. I recorded it with a video camera and with a still camera equipped with a 300mm zoom lens. Later on, two more mountains were visible, the second one being a much larger rockier and mountain. Afterwards, looking at a map, I can guess that the first beautiful mountain was Mt. Adams, the second Mt. St. Helens, and the third one Mt. Rainier.

The white cigar-shaped cloud remained there even after I was done photographing the three mountains.

Finally reuniting with Takashi!

Roughly around the same time I departed the plane I was on arrived at the Seattle-Tacoma airport at 5:33 PM on the 22nd of June. As I followed the signs marked "Immigration", somebody grabbed my arm. I turned around and saw Takashi Okamura. "I haven't seen you for a long time!!" We rejoiced at our reunion. It seemed that 30 years worth of separation instantly vanished at that moment.

In order to find my luggage, we went over to the many turntables. However, the display "AS-287" did not appear for a long time. I explained to Takashi that it was a suitcase of a particular size, and that it had two bear dolls on it. We split up to look for it at separate locations. "Here it is!" Takashi found my suitcase, but one of the dolls was missing. Takashi guessed that it had rubbed off during the loading or unloading process.

We got on his car in the parking lot, and after a dizzying descent on a spiral ramp and emerged on the ground. It was sunny outside, and although the sunlight rained directly down and the air temperature was not very different than that of Japan, the wind was cool and refreshing.

Although I had ridden in buses in Washington D.C. and New York, riding right next to the driver in a car traveling on the right side of the road was a new experience for me.

The highways were crisscrossed in midair in

great arcs, similar to what I had seen in science fiction comics in the past. There were no congestions and the trip was comfortable. I found the fact that some of the opposing traffic had their headlights on to be a little odd, but according to Takashi, it was a form safety measure and that he has a car which headlights would turn on automatically at all times as well. In Japan, the only times drivers would turn on their lights would be during bad weather when visibility would be limited, and only motorcycles at other times.

At the Okamura residence

Located near Seattle, Takashi's house was in a quiet neighborhood in the city of Bellevue. When I got out of the car and entered the house, his wife greeted me with a smile. I said my standard greeting, "Hello, I'm Amamiya. Pleased to meet you."

Upon entering the front entrance, my first thought was "Wow, what a big place. This is like the inn I stayed at in England." Contrastingly, my cramped house back in Japan is packed with pictures, photographs, samples, books, videotapes, and files, leaving almost no wall space exposed. However, looking at the wide white walls accented with refined Japanese picture frames felt like it would cause me to become more refined as well.

I was guided further in, and in a room where kitchen, dining area, and living area were merged into one large room, I rested while sitting at a table in the middle facing Takashi.

It appeared that school was already in summer break, and his son and daughter were watching TV in the living area. His son had graduated from high school and was due to go to college next autumn, and the daughter had just finished 7th grade. Conversing with the frank and intelligent wife relieved me from my anxiety during the travel and helped me rest.

First, I handed to Takashi the resources I brought from Japan. The suitcase was emptied out leaving only my change of clothes inside, but the open space was due to be filled with other books I was going to purchase there.

Takashi then briefed me about our schedule. From arranging to dates to the purchase of the airline tickets, I had left everything up to him.

I was guided to the room I will be staying in, and was instructed on things such as how to open the windows and how to operate the blinds. After unloading my luggage and while I waited for dinner, I talked with Takashi about many things, such as old memories and old friends, and the discussion of the current situation as a continuation from 30 years ago.

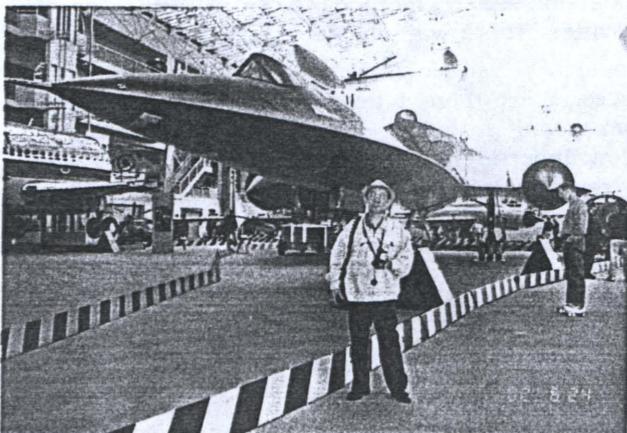
Knowing each other through flying saucers and

the CBA, we came to share similar views of the world and cosmos. However, that view disagrees with many of the popular views present in the UFO community as of today. The popular trend has been to cast the UFO issue in the same light as phenomena in the spiritual and occult field, and phrases such as "UFO crashes", "Recovery of ET corpses", "abductions", "spiritual encounters", "Secret contracts between the ET and the U.S. military", and "Top secret uses of ET technology", which to us mean nothing other than "errors", "misconstruction", "ailed minds", "erroneous", and "fabrication", have contributed to the path that the popular view has taken.

For the past 40 years, we have continued to bring to the attention of the world, facts relating to "UFO sightings", "UFO photographs", "Incidents of UFO encounters", "Meanings of UFO visitations", "UFO records", "UFO history", "Investigation of UFO intelligence", "Investigation of legends of ancient space visitors". These facts are orthodox in nature, and should be available as a subject to be taught to all youth in the world. Much of these facts, which can be used to promote world peace and the proper advancement of civilization, are in conflict with the majority of the popular UFO-related information in circulation currently. Which side will eventually lead the UFO information in the world? The relationship in power among them right now indicates an apparent situation where one vastly outnumbers the other. One would hope for some sort of intervention by real UFOs as an additional form of help.

Museum of flight

Early in the morning of June 23, Takashi and I arrived at the Museum of Flight. Looking from the parking lot, I could see a number of aircraft on display outdoors. Deciding to look at those later, we went into the building, and put on a sticker that was given to us as we paid the entrance fee. This was the third time that I had visited a museum of flight overseas.



In a large room where sunlight poured in through the skylight, many famous aircrafts from around the world were on display, including Migs, an F-4 Phantom, an F-86, and the giant black SR-71, a strategic reconnaissance craft. I gazed at the ceiling to find a Douglas DC-3 suspended with wires. With the square windows and landing gear that was embedded into the twin engines, I could almost hear the narration "Captain Smith and the stewardess have witnessed 9 flying saucers..." once again.

There was a fighter plane on display which they let the visitors sit in the cockpit, so I had Takashi take a photograph of me sitting in it. In a dark room where they had much information regarding the memories of astronauts on display, they had a corner where people would be graded on their performance in a space-walk simulator.

According to Takashi, the state-of-the-art Boeing 777 is a plane built without a blueprint. The designing processes took place entirely on computers, which was in turn, linked directly to the manufacturing process.

The olden days of the airplane industry was on display as well. Wooden propellers, the actual tools used to make them, and photographs of women workers laying fabric on the base structures of planes, let me see a glimpse into the history of airplanes in America.

In the area where space exploration was the topic, I was able to see displays on the history of rockets, as well as replicas of the Apollo and Gemini capsules. I especially paid attention to the replica of the Apollo command vessel, where the hatch was opened. This opened hatch door was of particular interest to me. There was once an article by a famous researcher, with an illustration and a caption that read "Could this be the face of an alien in a UFO window?!" But I noticed that the "window" was in fact rivets on the Apollo command vessel, and the surrounding shapes in the illustration matched those of a section on the hatch. I wrote a letter to the publisher notifying them of this fact.



Then, after seeing the moon rocks, we briefly looked at Air Force One, and approached the B-29 and B-47. Both were involved in incidents with UFOs, and I had Takashi take photographs of me with the planes in the background.

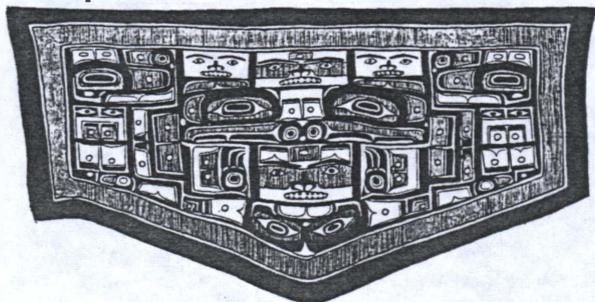
Afterwards, upon returning to Japan, I had my wife inspect the photographs and she told me that there were a few that had unusual points in them. One of them, a photograph with the B-29 in the background, caught my attention in particular when I saw a triangular object in the sky above the plane.

I inspected the negative with a loupe, but the triangle was not any sort of phenomenon caused by blotches or inconsistencies in the developing fluid or the emulsions, and was part of the image itself. I asked for an enlarged print at a local supermarket, but the first copy came back with the sky lightened so that my face would appear normal. I asked for another copy, this time darkened so that the sky would appear more vividly, even if it meant that my image would be underexposed. I examined this copy to find that it was a light aircraft viewed from an angle. Sunlight had reflected off the main airfoils giving it the appearance of a white line, and the fuselage appeared to be a black, triangular silhouette.

Seattle Art Museum

Seattle is a city of many inclines and one-way streets. We circled around the same area many times in search of a parking spot, and we were finally able to park the car when we encountered a car just about to leave one. The art museum had all kinds of art on display, so we only went to the floors that had the art of the Native Americans that which was of interest to us at the moment.

The highlight of the displays was the two wooden sculptures of thunderbirds. They must have been at least 5 meters tall. Also, we focused on the motif of the "eye" that appears in many works. "This is also the rim of a flying saucer", as Takashi said, they are indeed very similar to the side view of a flying saucer. It would be easy to dismiss the similarity saying that eyes look like that anyways, but we have always considered it important that, as with the "Eye of Horus" from Ancient Egypt, that shape has been a "sacred shape" since the ancient past. It would be safe to say that all occurrences of that shape around the world resemble a UFO.



We the people of the modern world have first perceived the UFO's as a "saucer", then as our own civilization advanced, a "spaceship". If the people of the ancient world wished to leave a record of the "unknown", or rather, the "entity which has guided them", it is natural for them to use whatever they are familiar with in their daily life, especially the horns or other body parts of animals in their attempts.

Afterwards, I was fascinated by the multitude of books and photographs that contained Native American art that was for sale in the gift shop of the museum. While I would have liked to have purchased many things there, none stood out compared to others, and as I considered the slightly expensive, \$40 price tags, it became time for us to leave.

Argosy Cruises ~ Blake Island State Park Tillicum Village

After having a lunch at a Japanese restaurant near the harbor, Takashi and I stood in line for the ship that was to leave for Blake Island at 4 PM on Pier 55. On Blake Island is Tillicum Village, the birthplace of Chief Seattle whom the city of Seattle is named after. I heard from Takashi that they were performing a show based on the Native American legends of the Pacific Northwest in Tillicum Village, which sounded quite interesting.

The trip to the island was 45 minutes long. The ship was like a small pleasure boat, and we sat in seats on the first of the two floors on the vessel. The seats were just chairs placed on the deck, and we were free to arrange them to our liking. As the scenery around us changed, we moved places on the ship and thoroughly enjoyed the remarkable sights. The 184m tall tower, the Space Needle with the saucer-shaped top stood out in particular. In the distance, a white cruise vessel approached a slower tanker from behind. At a harbor on the other side, the latest military vessel was anchored, and many cranes lined the waterfront for the loading and unloading of cargo containers.

Before container ships, I used to work loading and unloading cargo from ships in a harbor in Yokohama as a method to earn funds for my activities. There was always a poster calling on the people to "reduce fatal accidents" around those places. Back then, I heard stories of people dying from falling into the ocean or the ship deck far below. Indeed, one of my buddies broke his leg when a stray piece of lumber fell on him. With Takashi, we reminisced about the days when we'd earn funds by working in those hazardous places. Taking advantage of this opportunity, Takashi and I discussed many things that happened in the last 30 years, and with that, I felt relieved that we had bridged the gap of 30 years.

As the ship approached the island, a large

symbol on the main building, as well as many totem poles around it came into view. Walking up a slope towards the building on land, we were handed a Styrofoam bowl with clam soup in it. We entered the building and consumed our clam soup. The clams were large and tasted excellent.

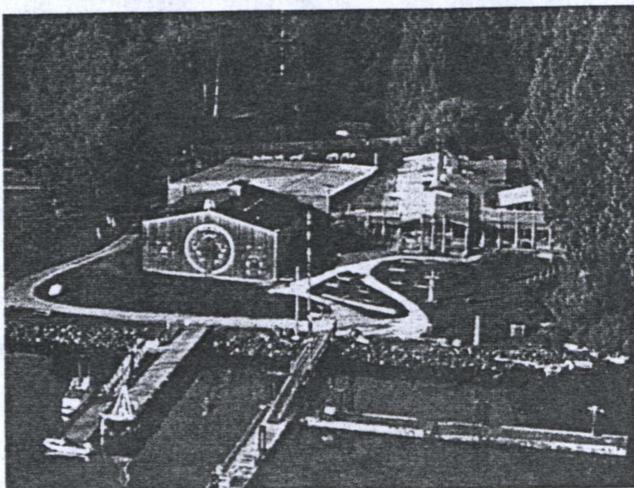
Further into the building, there was a large room that had a simple theater to one side, and other people had already taken their seats with their meals in the room. We proceeded to a seat towards the very back of the room, and had our meals too. The food and beverage suited my Japanese tastes quite well.

Eventually, a play started on the theater. Towards the upper-left, there was an illumination that was supposed to represent either the moon or the sun. Rather than an illumination, to me, it looked like a paper lantern I would see at a Japanese festival. There was a narration starting with "Long, long ago...", but I could not comprehend most of it, though I believe I understood most of the story by just watching. I moved to a seat one step higher, and started recording the play with my video camera. However, the tape reached its end midway through and it was a new experience for me to replace a tape in a video camera in the dark.

Towards the end of the play, an object like a large vehicle was raised silently into the air. To me, it looked like the takeoff of a vehicle such as a Thunderbird.

Later, as the ship departed the island to head back to Seattle, there was an announcement that there was a crewmember left behind on the island. The ship turned around and headed back to the island, and the marooned young woman was greeted with cheers and clapping by the passengers as she boarded and the ship resumed course.

Takashi and I returned to his house at around 9:00 in the evening, but it was still light outside. As it was in England, the brightness from midday lingers in Seattle until past 8:00 in the summertime. I also learned that during the wintertime, daytime is very short, and the day quickly turns to darkness



once the sun sets. Also, there seemed to be less dust in the environment than in Japan, and checking with Takashi's wife, she confirmed that that was indeed true. I had a discussion about the differences between Japan and America across a wide range of topics. Especially in the areas of education, it was apparent that Japan's trend of reducing class time and educational content opposed the rest of the world, and would inevitably bring about a national decline eventually. The stories from Takashi's wife, who was an educator herself, proved to be a good reference.

Mt. Rainier

It was the morning of June 24. I looked out the window to see a sunny, cloudless day. I got dressed, and took out the rubber replica of a flying saucer and the CBA flag (Sun disc flag) with an ISS badge attached, which I prepared for that day. I unfolded a metal bar, and attached the flag to it. And, with the book *Search for Evidence of Extraterrestrial Intelligence* and filming equipment with me, I went downstairs for breakfast.

Takashi unfolded a map, and explained to me that there were two sightseeing locations on Mt. Rainier, Sunrise and Paradise, and their respective characteristics. He asked me "Which would you like to go to?" so I replied that I would like to be able to visit both. So we decided to go to Sunrise, then Paradise.

He brought with him, a camera, a cell phone, and an icebox that contained the lunch his wife had made for us. That day, we rode the SUV instead of the normal passenger car.

We departed at 9:30 AM. The air temperature was 21° C and we had a 420 km path to go. We proceeded along highway 405, 167, and then 410. As he had told me in his email message earlier, the sunlight was strong outdoors and I felt it necessary to put on an inexpensive pair of clip-on sunglasses that I had brought with me on top of my regular glasses. Near the horizon across the bracing air, Mt. Rainier gradually became visible. I took out my video camera and still camera and started to record and take pictures of the mountain, but I had forgotten the lens filters that would have been perfectly suited for this situation. I regretted my lack of preparedness.

As the road began to progress between the mountains, I was amazed by the sheer scale of the giant cedar-covered slopes on both sides. The view was truly magnificent.

Takashi told me that the Bigfoot is frequently witnessed in Washington State. Surely enough, the deep woods looked like as though Bigfoot would be lurking somewhere in there.



Along the way, we stopped at a store to buy soft drinks and gum. Riding in the car for long periods may cause sleepiness, and the chewing gum was to prevent that. The road ran along the beautiful flow of water called the White River, and the river was visible from time to time on the right-hand side of the car. Occasionally, there were thick sections of snow not yet melted, and the origins of the flow could be seen trickling under the snow banks.

Eventually, we reached a fork in the road, with a sign indicating "Sunrise" to the right. As we proceeded on that road, we encountered a gatehouse staffed by an elderly lady. As we paid a fee and received a map, she informed us that "Sunrise is closed" since it was "still off-season". "But it's already summer!" said Takashi, sounding surprised. We decided to go as far as we can anyway and see if we can see Mt. Rainier from there. However, the road became rough and further along, there was sign that the road was closed. We were surrounded by hills at that point so the view was not great either, and thus we decided to head back. Because the map we had received earlier had pieces cut out of it, we had it replaced with a new one by the lady at the gatehouse.

Next was Paradise. Told to look at the map carefully for any side roads, I scrutinized the map carefully. In order to reach Paradise, we proceeded along Highway 410 for about 5 km and entered into Highway 123. After proceeding for 18 km, we took a 90 degree turn into a road with the sign "Stevens



Canyon Entrance" by it.

Mt. Rainier was gradually appearing larger, and was visible from time to time on the right, sometimes on the left side as the car traveled along the winding road. Looking at the map, I realized that we were already 1400 m above sea level. Sometimes, it became hard to hear because of the atmospheric pressure difference. I swallowed my saliva many times to alleviate that condition.

Up ahead, we saw a clearing with a building in it. In the parking lot, we saw a few other cars parked. This was Paradise. Like the name, Mt. Rainier and Tacoma was a paradise or heaven for the Native Americans. According to their legend, when an immense flood inundated this region, God told them to shoot many arrows to the cloud that hung over the mountain. When they did as they were told, the arrows joined together to form one rope, which the people climbed and took refuge in the cloud.

After what could be a thousand years after the incident in the legend, on June 24, 1947, one of the great mysteries of the 20th century, "flying saucers" would appear above the legendary mountain of the Native Americans. Kenneth Arnold would be the eyewitness to the occurrence.

The time was already past noon, so we took our lunch and looked for a place on the snow to eat. I was wearing leather shoes, so I climbed the slopes like I was tapping the snow with my heels. Sitting on a rock near the base of a tree, we ate the lunch that



Takashi's wife had made for us while gazing at Mt. Rainer gleaming under the blue sky.

After we were done eating, we returned to the car, and climbed back up the snowy slopes after retrieving the flag and cameras. Takashi said that he would act as the cameraman, so I had him record me as I climbed the slopes holding and sometimes waving the flag.

On a small hill, I don't know who placed it there for what purpose, but a yellow pipe was thrust into the ground. When I tried placing the flagpole into the pipe, the pole stopped midway, and the flag fluttered at just the right height.

First, I held the flag up and Takashi took a photograph of me, then we asked a young man passing by to take a picture of Takashi and me holding the flag.

Then, we dug a hole near the root of a tree with our hands, placed the copy of "Search for Evidence of Extraterrestrial Intelligence" wrapped in an envelope in the hole, replaced soil on top of it, and camouflaged the spot with leaves. With this, I was finished with my private "ceremony".

We then bought some souvenirs in the business center, and when we returned to the car, my impatient personality made me want to go home. When I told Takashi of this, he seemed surprised and asked back "Weren't we staying until 3:00?" He was absolutely right.

Glancing at my wristwatches occasionally, I observed the sky. I had on two watches, one showing the local time and the other showing the time in Japan. At 3:00 PM, a light aircraft appeared, circled the mountain once, and then left. Watching this, I thought, "Could this be an event related to the Arnold incident?"

Takashi asked me, "Until when will you be observing?" Hearing this, I suddenly remembered, "Today was a day to welcome UFOs on this mountain." In reality, I was so caught up in getting to this place that I had completely forgotten that I was planning to observe the skies for UFOs that day. As proof, I was staring at the sky without even preparing the still camera, video camera, and outfitting them with the 300mm telephoto lens. Trying to hide my agitation, I believe I managed to give a nonchalant answer of "Let's stick around until 3:30."

Above the peak of Mt. Rainier, there was a constant flow of clouds, and they acted like a curtain on a stage, continually hiding and revealing the peak. I noticed a dark object moving near the peak. It was a number of birds, and I could distinguish

about three. I remarked to Takashi, "Those birds are flying really high in the sky" but he replied, "I don't think they're that high up." Surely enough, their location appeared to be near the peak since I was observing from below, but in reality, the mountain is enormous in comparison to the small birds, so they must have been closer at a lower altitude.

Takashi asked me if I was going to take any rocks with me. In the past, I had taken with me molten rocks from Deccan Plateau, stones from Silbury Hill, and a jewel-like round stone from Avebury. I had to take a piece of the sacred mountain with me as well. I hurriedly picked some rocks, but Takashi told me there should be better ones, so I discarded the ones I just picked up. Down lower on the mountain, there was a place where, rather than pebbles, I could gather fragments of boulders that made up Mt. Rainer itself. Without any particular reason, I picked out 13 pieces of the mountain and showed it to Takashi, who confirmed that I had 13 pieces.

Boeing Factory Tours

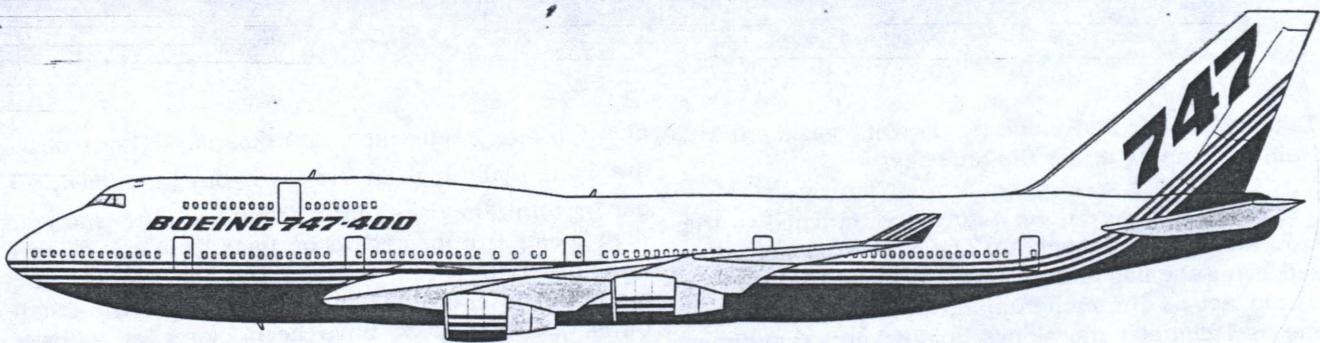
June 25th was the Boeing Factory tour. Takashi had reserved spaces for us both beforehand. An aircraft manufacturing company of 220,000 employees, Boeing had produced the fleet of the B-29 heavy bombers that flew over Japan during WWII and, currently produces 40 747s per year alone. Today, three out of four passenger aircraft in the world were made by Boeing. When William Boeing built his first aircraft in 1917, it is said that he had seven employees in the company. The body of the aircraft was cloth stretched across a wooden frame, and the wings were made by a seamstress at a laundry.

There are Boeing factories in many locations, but we toured the facility north of Seattle in Everett, where jumbo jets are manufactured.

That morning, Takashi and I arrived on the plant parking lot at 9:00 AM. I could see an enormous white rectangular building, with enormous doors to match. The size of the doors would be the natural thing; assuming that completed planes will exit the building through those doors.

In the waiting room for tours, there were already a dozen or so people of all ages waiting. The room had displays and photo panels explaining the history of the Boeing Corporation, and I spent my time looking over them while I waited for the tour to start.

It was time to start the tour, and we were gathered into a classroom-like space with a large projection screen. A well-built young lady started explaining many things, which I had Takashi translate for me. According to him, the tour involved



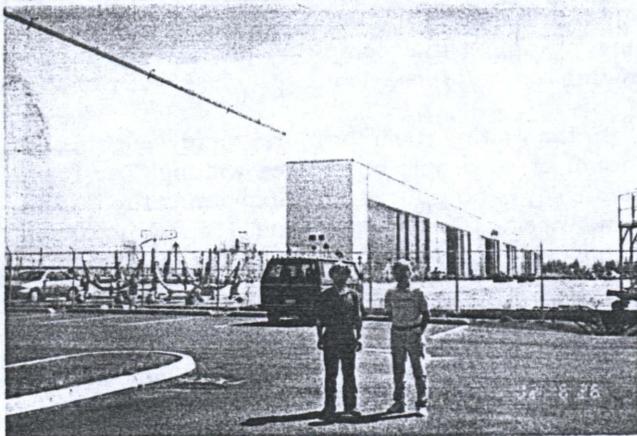
walking long distances as well as up and down many staircases in the factory, so younger children were not allowed to participate. There was to be no restroom breaks, no photography, and carrying in anything with us was forbidden as well.

There were about 20 to 30 people in the tour group I was in, including some children. I heard that many Japanese tourists participate as well, but I did not see any that day. We descended a staircase, and proceeded quickly down a long underground walkway.

On a large elevator, we ascended up from underground. As we proceeded along the walkway for visitors, we arrived at an area where we looked down on a gigantic area. The jumbo jets were assembled in this space. There were many cranes overhead on the ceiling, and I could readily count at least 30. The pieces of the airliner are carried by these cranes, put into position, and assembled by the workers. In the explanation, they said that the employees used bicycles to get from place to place in the factory. I gazed down below, and surely enough, there was a man on a bicycle. Right underneath us, I saw the area where they were going to place the aircraft wings, as well the half-completed cockpit to the left. The sound of riveting could be heard, but I could not see where it was coming from.

There did not appear to be any big movements and I did not see any parts or pieces hanging from the cranes, but only a man and a woman strolling and talking casually below.

As we proceeded further along the visitor's walkway, we arrived at a gigantic life-sized cross-section model of a jumbo jet. However, I was surprised when I saw the thickness of the outer metal sheet. Being only 2mm or so in thickness, I became uneasy when I imagined that such a thin



wall stood between my "life" and "death". Also, the thickness of the passenger cabin floor was about 1cm. I became worried at the fragility of these airplanes, but it also reinforced the notion that I was putting my life in the hands of the plane once I board it.

On the elevator once again, we descended underground and proceeded back through the underground passage. We boarded a bus and moved to a lot on the other side of a highway. The place was comparable to a parking lot for airplanes, with airliners painted in the various company colors from around the world, and residing there due to be delivered to their respective "customers".

I heard that the transfer of planes from the factory to the lot always took place in the middle of the night. Since the planes cross the adjacent highway, accidents may occur during the day when distracted drivers make errors in driving while watching the move.

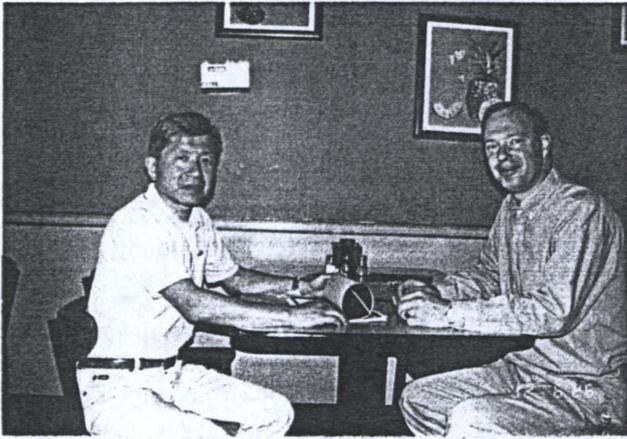
The bus stopped in front of the waiting room, which concluded the tour. There was a gift shop for visitors, so Takashi and I looked around in it for a while, and bought a simple solid model of a Boeing 747 and 777 as well as four books with beautiful astronomical photographs. We decided to take a picture of ourselves with the Boeing factory in the background, so we wedged the camera stand that I received in England in the past, into the fence, and used a timer to take the photo.

UFO Talks

After the Boeing factory tour, Takashi and I headed to the place where we promised to meet and have a talk with Takashi's UFO researcher associate, Robert Duvall.

We came to a section of a town where restaurants with parking lots lined the streets. Passing through one parking lot, we entered another, where Takashi remarked, "Ah, that must be him" and parked our car next to a minivan. There was a man standing next to the minivan. It was Robert Duvall.

After greeting him, the three of us entered the restaurant. The store had a unique system, where the customers picked out uncooked food to their liking onto their plate from an array of vegetables and meat, and have them cooked on a large metal plate. The cook, who seemed to be of Asian descent, took our food onto a circular plate about 70 to 80 cm



in diameter, and swiftly chopped the food up with a large knife about 30cm in length. Robert paid for me, and I thanked him.

I was aware of Robert's activities since Takashi notified me many times through his email messages, but in order to have the readers understand him more, I will include a message from Robert that I received through Takashi.

My interest in UFO is driven by the fundamental question of why they are here. I have looked for this answer in many places, some of which Takashi has directed. It is not hard to see that they have been here for a long time — ancient history shows this to us. I thank Takashi for directing me to ancient studies and for providing me with much data and ideas. At first, I was interested in recent wars (WW2, Korean, and Vietnam) and sightings during those conflicts. There were so many military sightings that seemed to be more related to nuclear activity that I decided to first separate this data and understand the relationship. Then I could study and understand wartime activity. The nuclear related study is fascinating. I now understand there are attempts to influence our global societies to minimize the threat of destruction using nuclear weapons. This is good. I am devoted to build on this information and to somehow make it available (book and/or web site) for many to see.

..I want to thank you, also, for bringing to me material which I consider to be the highest quality and most supporting of the overall story. I believe you understand what is happening better than I do. I hope the work I produce will stand firm as yours does.

I look forward to working together in the future. At some near time, I'll send you a sample of the framework I'm developing. It will be the basis for the book or web site.

As it can be seen in this message, he places great weight on what could be the core issue of UFO information, where nuclear weaponry is involved. It is the issue that the CBA has spoken out to the world in the past as well. After all, the presence of nuclear weapons affects the fate of this planet Earth,



and is clearly not just a problem for Earth alone. When viewed from outsiders, Earth is a planet that is carrying great amounts of weapons of mass destruction. We need to be more aware of that fact.

Now, I will continue with the introduction of Robert. By saying that "I wish to introduce you to the readers in Japan", I unwittingly asked him a number of potentially rude and personal questions, such as his age, height, and family members. However, he answered them a smile, saying that he was "44 years old, 6 feet (180 cm) tall, and had a wife, two daughters, two cats, and a dog." When Takashi supplemented my questions where it was hard for him to understand, he reassured me that he could not hear because of the noise in the store. Indeed, the store was filled with the loud chopping noises, but I find that I am at ease more in places like that than in silent places where our conversation could be heard from other tables.

Before I went to Seattle, I received question from Takashi regarding the connection between facts, one of which I am currently researching through books.

The second question was regarding the world's first nuclear experiment at Alamogordo, and according to my recollection, I was told from an old acquaintance that it was in the Japanese book Path to Destruction, but I did not have access to any copies. However, I reported my situation in "Ufology Resource".

When the topic of discussion with Robert touched on that, he told me that he had coincidentally found that book last night, and told me the details. It was just as my old acquaintance had told me, and I was surprised at this coincidence.

One of Robert's relative was in the Vietnam War as a radar operator in the Navy and was also a witness to the "Mysterious helicopter" that appeared in the demilitarized zone. On October 16, 1973, the Chief of the General Staff of the United States Air Force, General George S. Brown stated that "it was not called a UFO, but an enemy helicopter".

When Takashi asked Robert if he had "anything to ask or say to Kiyoshi", he thought for a while, and then answered, "I'm merely following in your footsteps, and I hope to someday catch up to your level of understanding". I believe that having the honor of hearing such wonderful things is due to the fact that Takashi had explained about me in detail to Robert beforehand.

Although it was only a short period of time, I was thoroughly impressed with Robert's sincere attitude and dedication, and I hoped that we would meet sometime again when we parted. After the meeting with Robert, Takashi and I went to a bookstore. There, I bought so many books that my suitcase was considered an overweight baggage at the airport and I was delayed because of the confusion.

The evening before my departure at the Okamura residence

Until a few years ago, I had uttered to some close people that there wasn't much hope in further developments and I was reaching my limit ability-wise and endurance-wise, so I might put an end to publishing the "UFO Researcher".

However, call it coincidence or fate, the "invisible hand" would not let me rest and gave me new jobs and new possibilities and directions I might be able to pursue.

"We're having a barbecue tonight. Please relax while we prepare", Takashi told me, so I rested inside while he, with the help of his family, set up the chairs and tables in the backyard.

Even after sunset, the sky was still light, and very few insects seemed to be present. (Although there were some, they differed from the insects I speak of in Japan. Seattle's latitude is more north than the northern-most prefecture of Hokkaido) There also seemed to be less dust. (There was no dust blown around by the wind). Above all, the air temperature was neither too hot nor too cold, and was very comfortable. I was fortunate to be able to enjoy a meal in such an environment. However, there was no alcohol on the table.

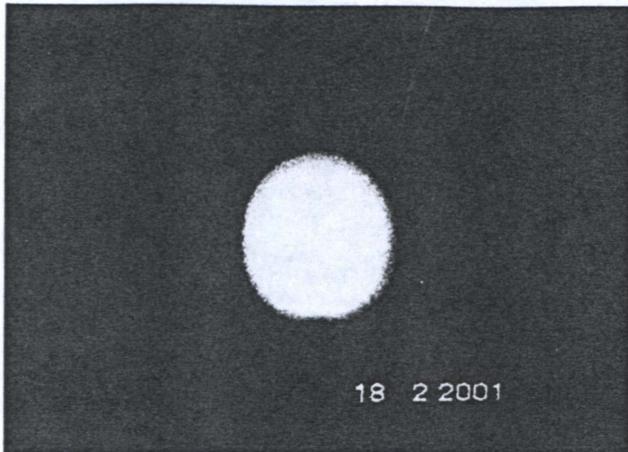
Takashi's son's friend also joined the barbecue, and I was witness to the son's bilingualism as he conversed with his friend.

Although there is much more I could write about, I now conclude this account of my travel to Seattle.



Construction work of HAIPIRA in which Okamura and Amamiya participated (1965 age)

中国雲南省泸沽湖上空のUFO映像



■『飛碟探索』2002年1期にカラーで掲載された写真。夜間光源のため、自動焦点機能の有無、またそれを解除したかが分からないと判定できない。

2001年2月18日午後5時過ぎ、中国雲南省麗江(リージャン)地区泸沽(フーグー)湖上空に白色で球状の発光体が出現、薄(ポー)氏によって撮影された。その経過は以下の通りである。

その日、薄氏は工作中、突然説明の出来ない電話機の騒音で部屋を離れ、気晴しにフーグー湖湖畔に来た。そのとき、晴れた空に1個の皿のような、強く白色に光る物体が空中に浮いているのを見つけた。

彼は周りで作業していた従業員にこれを知らせ、皆でこれを見た。彼はすぐ、走って500m先の自宅から家庭用ビデオカメラを取ってきて、物体を撮影しようとした。しかし、カメラは動かなかった。バッテリーの充電が切れていたからである。彼は部下を呼んで、外部電源に接続した。

そのとき、双眼鏡(雲南光学製15倍)が持ってこられたので、彼はそれで詳しく物体を観察した。

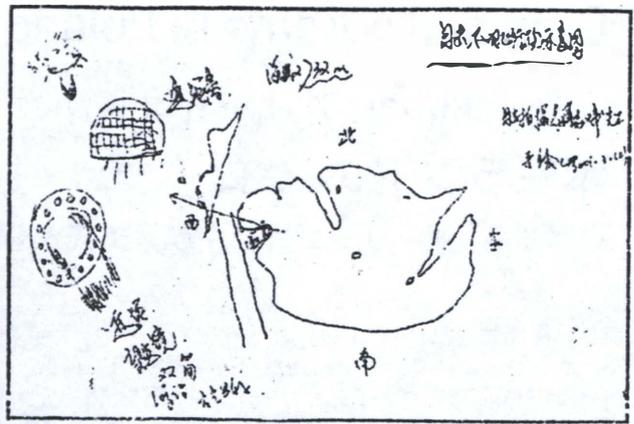
物体は皿状で真ん中が凹み、全体より比較的暗く中空であった。

また、円形の周辺に強く光るものがあった。(目撃図を参照)

3月12日午後、この画像を鑑定した段立新氏によると、球状像の下が切られた状態であること、球体の表面に規則的な網目構造があること、切られた部分から噴射物があることを認めた、という。

この出来事は山西省UFO研究会劉鳳君教授提供の『飛碟』2001年4月16日号、『飛碟』2001年8月16日号、『飛碟探索』2002年第1期に紹介された。『飛碟探索』に掲載された写真には「撮影:段立新」となっていたが、段立新氏は山西省UFO研究会の『飛碟』2001年4月16日号で事件を紹介した、また映像を検討した研究者として「雲南泸沽湖上空“不明飛行物”拍攝経過実録」の筆者である。

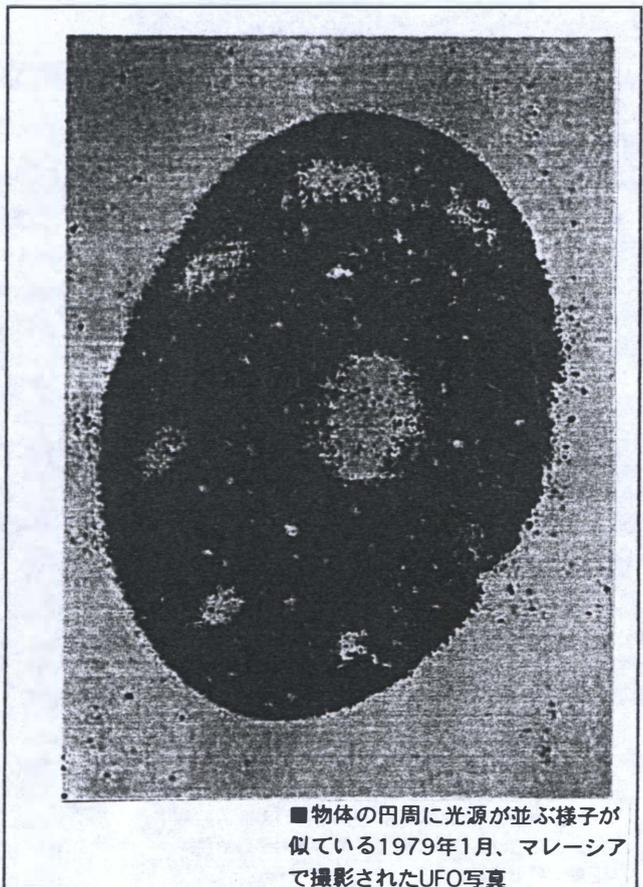
目撃図と一枚の写真だけでは研究資料に成りにくい、ドーナツ状で周辺に光点のある、マレーシアのUFO写真を参考までに比較材料として提示した。



■中国では珍しいUFO目撃画。平面的地理位置と山の上の位置、UFOの3態図が認められる。



■UFO映像を研讨する中国工程学院の学者や研究者達。



■物体の円周に光源が並ぶ様子が似ている1979年1月、マレーシアで撮影されたUFO写真

Crop pictograms in Poland

Robert K. Lesniakiewicz

ポーランドのクロープサークル

ロベルト・K・リシエニケーヴィチ氏からの情報

■新しい機関誌『SWIAT UFO』の発行

ポーランドの古都クラクフに拠点を持つ民間UFO研究団体MCBUFOiZAのヴォイス・コーディネーターRobert K. Lesniakiewicz(ロベルト・K・リシエニケーヴィチ氏=以下リシエニケーヴィチ氏と記す)からは、連日のようにEメールで『News MCBUFOiZA』が送られてくる。その宛先を見ると、ここ3ヶ月の間に5倍ほどに増加している。驚異的なネットワークの拡大である。つい3年前は手書きの手紙やタイプの書簡だったが、今や文章に写真、漫画、図面が張り付けられ、さらに添付ファイルで膨大な情報が届いている。ポーランド関係のA4ファイルは7冊になった。

雑誌類は『NIEZNANY SWIAT』が毎月、季刊『CZAS UFO』。書籍は日本語による『ピエリチカ-王の地底岩塩採掘坑』という全ページカラー写真の案内書から、リシエニケーヴィチ氏の著作が2点届いている。それらを逐一把握し理解するのは不可能であり、ごく一部を本誌に紹介するのが精一杯である。

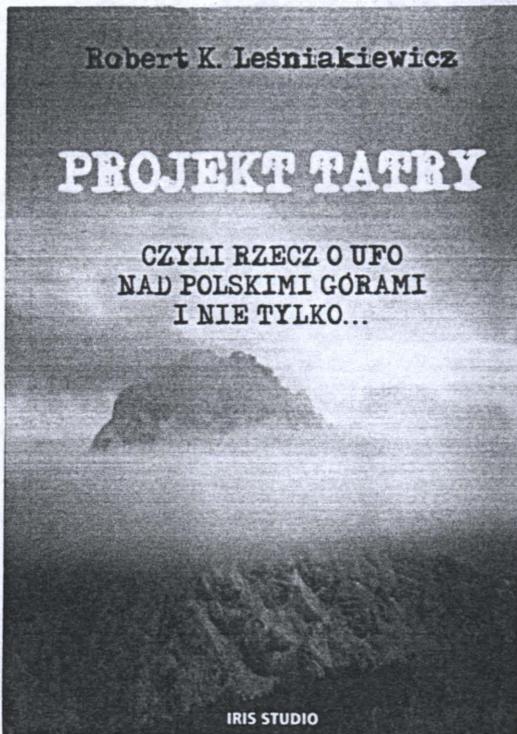
4月2日の連絡によると、MCBUFOiZAの機関誌『CZAS UFO』誌(A5判平均80ページ)が廃刊となり、新



■Robert K. Lesniakiewicz

ロベルト・コンスタンティ・リシエニケーヴィチ氏(同氏から送られてきた『PROJECT TATRY』の裏表紙より) 1999年以来、手紙、写真、VTR、雑誌、単行本、模型、音声・音楽の録音テープを交換し、最近ではEメールで情報を交換している。編者提供の原稿や資料が、彼の手を通じて広く紹介された。環境、軍事、UMA、天文気象などテーマも幅広く、現地調査など行動力もある。

しいUFOマガジンとして『SWIAT UFO』が7月からスタートするとのことで、その1号が7月初旬に届いた。体裁は『CZAS UFO』と同じだが、ページ数は120ページもある。年表、数表、UFO目撃状況図、地図上のUFO移動図、UFOと車の接近遭遇状況図、風景や町の写真に目撃

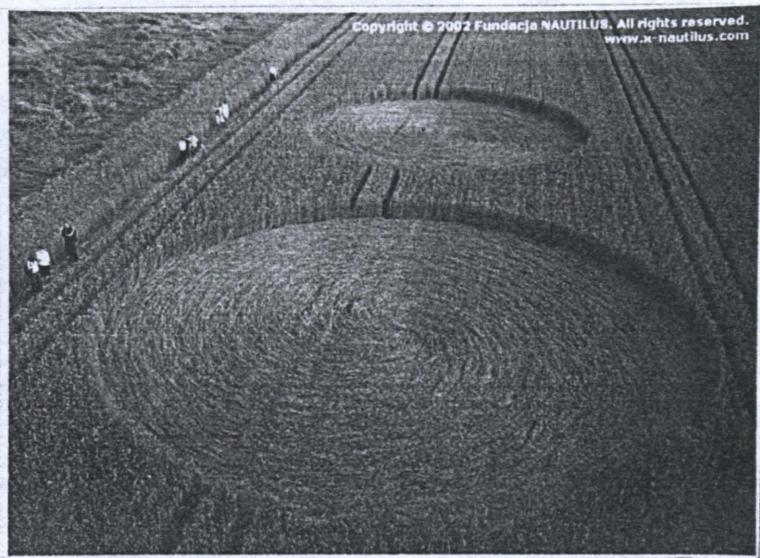


■リシエニケーヴィチ氏の最新の著作。装丁、印刷ともこの種の発行物としては最高の出来映えである。

彼は単独ではなく、若い仲間や同姓の女男兄弟姉妹と見られる個人が写真撮影、共同執筆や共同活動に名を連ねている。



■Zabłeski UFOクラブ撮影の美しいクロープサークル



■NAUTILUSによるクロープサークルの俯瞰写真。渦巻き状に倒伏した様子が見える。

Marsjanie poszli na łatwiznę

Zjawiska nadprzyrodzone ▲ Kto zostawia tajemnicze ślady w Wylatowie?

▲ Wylatowo | Grzegorz Dudziński
Badacze niezidentyfikowanych obiektów latających przez cały czerwiec wypatrywali spodków nad polem w Wylatowie (Kujawsko-Pomorskie). Tymczasem tajemnicze kręgi w zbożu – według badaczy ślady po UFO – pojawiły się po drugiej stronie drogi. Kamery ufoologów niczego nie mogły zarejestrować.

Na polu pod wsią Wylatowo w zieleńnym jeszcze zbożu pojawiły się tradycyjne już w tej miejscowości dziwne kręgi. To samo było dwa lata temu, podobnie w ubiegłym roku. Tym razem zmienił się jednak kształt wygniecionego zboża.
– Rok temu to były najładniejsze wzorki. Koła, wokół nich takie okręgi, to wszystko ze sobą połączone. Aż ciągnęło popatrzyć. A te-

raz UFO poszło na łatwiznę – śmieje się Jan Przybylski, rolnik mieszkający najbliżej „nawiedzonego pola”.

Mężczyzna nie widział żadnych świateł nad polem, spodków czy zielonych ludzików. Jednego jest jednak pewien – kręgów nie zrobiła ludzka ręka. Są zbyt dokładne.

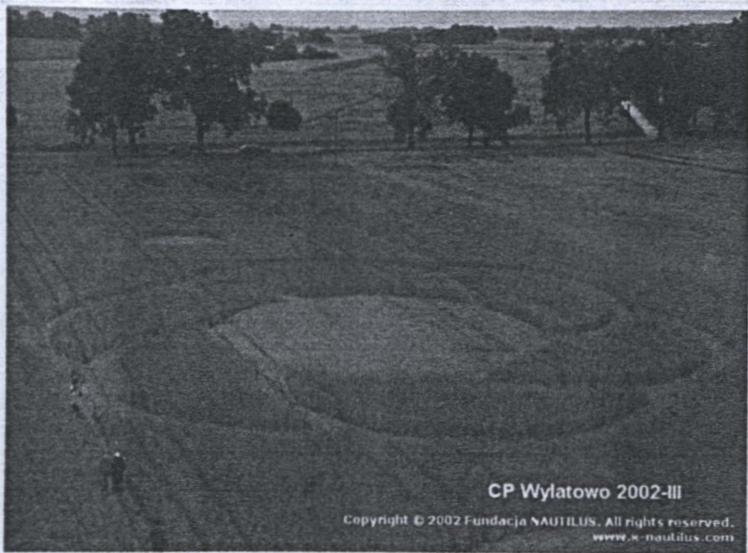
Tęgoroczne kręgi to pięć kół połączonych ścieżkami. Kłosa na ścieżkach kładą się w jednym kierunku. W okręgach leżą zgodnie z ruchem wskazówek zegara.

– To na pewno jakiś znak. Symbol przesłany nam przez obcą cywilizację. Na razie jesteśmy zbyt głupi, żeby go zrozumieć, i dlatego nie chcę z nami rozmawiać – uważa Halina Nowicka z Torunia, która również zatrzymała swoje auto pod Wylatowem. ▲

Foto | Edyta Dudzińska



Pole w Wylatowie – w tym roku pojawiły się na nim tajemnicze koła połączone ścieżkami



CP Wylatowo 2002-III

Copyright © 2002 Fundacja NAUTILUS. All rights reserved. www.nautilus.com

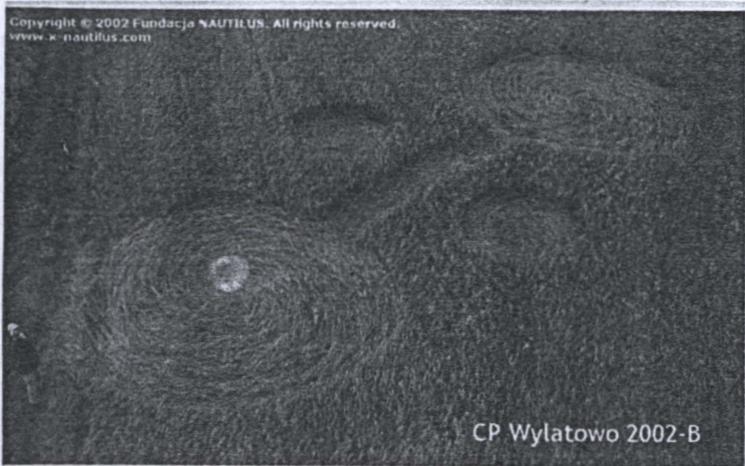
■ Wylatowo의サークル。英国でもよく見られた形である。

されたUFOの飛行を描き込んだ図、最新鋭の航空機とUFOの比較研究、1500年代中世絵画にみられるUFO的情景各種、古代の建築様式とUFO飛行スタイルの関係を示す図解、ピラミッドの図面が見られた。

■ リシエニケーヴィチ氏の著作

2001年5月20日に送られてきた『Wunderland』は、Miros Jesenskyという獣医師でUFO研究家及び有名なスロバキアの作家との共著である。いわゆる第三帝国の技術“ナチスのUFO”がテーマで、豊富な関連資料が掲載されている。

また最近届いた『PROJEKT TATRY』(B5判 265ページ)は彼が関わったUFOドキュメントと思われる。冒頭に中世のUFO絵画3点が掲げられ、UFOの歴史性を感じさせる。驚くべきことは、著者自身が撮影した写真の豊富さと、カラー写真の多さである。カラー写真ページは16ページもあり、そのうちの16点が“UFOらしきものが写り



Copyright © 2002 Fundacja NAUTILUS. All rights reserved. www.nautilus.com

CP Wylatowo 2002-B

■ Wylatowoのサークル。これも英国でもよく見られた形である。

込んだ”と判断された珍しい写真であり、著者の写真に対する熱心さが伺える。

また、白黒写真の中には“3つの太陽”の如き大きな発光体が正三角形の配置で写った写真も見られる。

リシエニケーヴィチ氏の文章に「NOL-i」とか「NOL-ach」という略語が頻繁にでてくる。ポーランド語で「NOL」とは「Nieznanych Obiektow Latajacych」の略だが、ポーランド語をアルファベットで表記したので正確ではない。

「NL」「NOL-i」「NOL-e」「NOL-a」の意味を知ろうとしたとき、一枚の写真に写っている“空中にある濃い灰色の楕円形像”に「NNOL?→」とあるのを見つけた。

とにかく、この件に関しては、いつか質問して意味をお知らせする。

■ ポーランドのクロップサークル

ポーランドにおける顕著なクロップサークルは、6月26日にWylatowo村に現われている。その俯瞰撮影された写

真を見ると、英国並みのピクトグラム、つまり絵文字に近い形を呈している。大きな図形の近くに小さな円が3つ並んでいるの英国のサークル現象でよく見かける姿である。シンプルな複数の円も6月に出来たようだ。

地元新聞に報道されたWylatowo村のサークル図形はまた別な形である。2個の円が直線で繋がれ、直線の両側に円があるこの形も、1990年代の初期に英国で見られた。

英国では近年、人間の手によるクロープサークルが急増し、「クロープサークルとは、すべてが人の手によるもので、UFOやETとは関係がない」という見方に落ち着いた感がある。

しかし、編者はクロープサークルの日本、英国での見聞と1980年前後からの経過を見るに、「すべてが」とか「全部」といった大胆な断定を下すには至っていない。

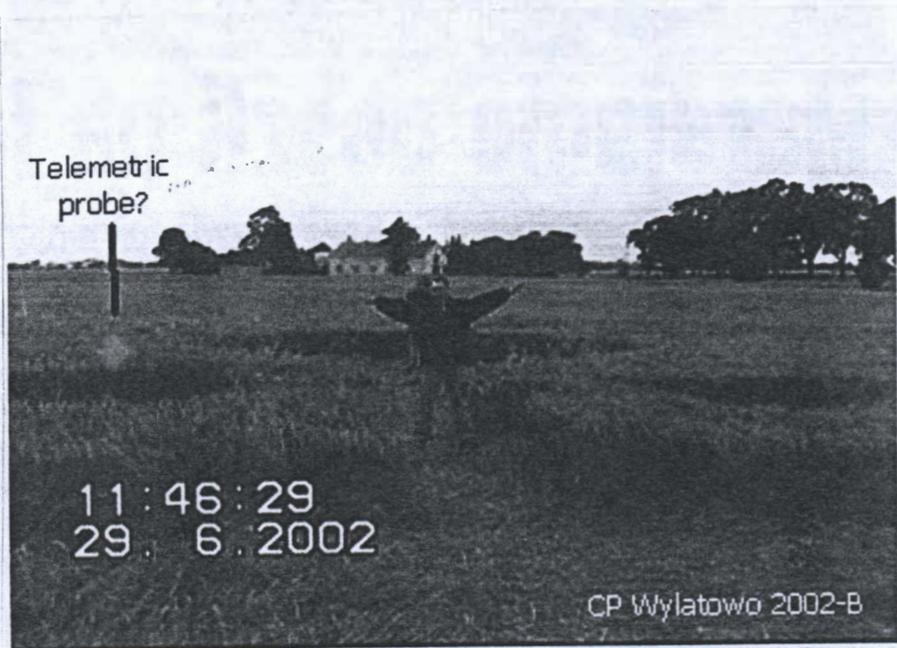
シアトルの書店で買った本の中にリンダ・ハウLINDA MOULTON HOWEの書いた『Mysterious Lights and Crop Circles』という最近の本があった。ハウ女史はUFO、キャトル・ミュージレーションなど様々な事件をものにするジャーナリストで、日本に来たこともある。

この本の中には、日本でも特番でよく見かけたクロープサークル近くで撮影された小さな発光体や、写真に写り込んだ奇妙な像を多数紹介されている。

また、クロープサークル近くで撮影された半透明の球がストーン・ヘンジにも写っており、これが光学的な現象か、UFO的な現象か、課題の一つではある。同様に、墳墓の内部写真に写り込んだ太い光跡とク

ロープサークル内で撮影された太い光跡の類似性も興味深い。また、麦の茎や穂にみられる奇妙な痕跡(ここでは曲線を描く茎)も、従来から着目されてきた。そうした写真類の中で、1999年にシルベリーヒル近くにできたサークルの端で両手を広げた女性のそばに写り込んだ半透明の円と、2002年6月29日にポーランドのWylatowoサークルを現地調査したりシエニケーヴィチ氏の仲間の近くに写り込んだ白色物体の写真の「雰囲気」が、よく似ていることに気がついた。ことなる国の二人に「このとき、あなたはどんな思いで手を広げたのですか?」と質問してみたい。あるいは、二つの写真を撮ったカメラを分解して原因を探るべきか…?

昼間なら太陽、夜間なら明るい光源がカメラの視野近くにあった場合、大小の円形や絞りの形をした反射像が得られるのはよく知られている。一方、クロープサークルの中心部から「揺らぐ光」が肉眼に見え、それを撮影した例(アウル企画『ミレニアム ミステリーサークル写真集』)もある。



■Wylatowoのサークル内で手を広げた男性の近くに5つの突起を持つ白色の物体が見える。



■遠方にシルベリーヒル。円形の像は輪郭が明瞭である。(『Mysterious Lights and Crop Circles』P.156より)

日本における編者の現地調査でも、クロープサークル及び雑草サークルの出現前になぜか発光体の目撃があった。これを、「人が作ったサークルに関心を持った発光体の活動」と解釈するか、「サークルと発光体の関係を示そうとする未知の知性の活動」と解釈するか、すべてを誤認で説明するか、人により分かれるところだが、現地で光体がサークルと関係した現象を目撃する日まで、態度を保留にするのも道として残されている。



■2000年におけるMCBUFOiZAJのクロープサークル調査活動。

IN ONE HOT AND BEAUTIFUL AFTERNOON...

By Jerzy Strzeja

In one afternoon in the Summer 2000, I went to seek fossils in a quarry of the Trias period from 213-248 million years ago. I have visited that quarry regularly for many years, and it can be a surprise for myself. Many times I have found different petrified samples of the Trias sea animals. However, some times samples have been destroyed by water and the sun, I have a lot of corals, mollusks, shells and pieces of bones. There also I found complete vertebrae and ribs of the Plesiosaurus. There are also traces of the animals' feeding. When I "discovered" that quarry, I was not knowing, what I really could expect there. And I found a stone with sharp impression of the human's foot. It looked like a trace of the left foot, but its toes were covered with a hill of the right foot - see a photo. I was in the Trias quarry, and in that time, circa 230,000,000 years ago, a presence of the human being was impossible at all!...

I brought it to my home.

Later I presented my artifact to two scientists: Prof. Lukasz Karwowski of the Silesian University, and Prof. Andrzej Grodzicki of the Wrocławian University. They both were very interested in that sample. They stated that that foot-printings had been made by mollusks shells. I really do not like to hear about the incidentally events. The Earthian life - according to scientists - rose by accident, which is almost impossible, but real. When I read about an impossibility of the incidentally initiation of the DNA-structure of the most primitive life form, I pinch myself into the various parts of my body, (temporary) unbelieving in my own existence. I thought that that artifact may be interesting not only for scientists. Robert K. Lesniakiewicz thought the same, and thanks his initiative I wrote this report.

I'd like to appeal to all my Readers at the end: Watch on the ground under your feet! - sometimes it is fruitful!

Of course, Mr. Jerzy Strzeja is absolutely right. It is very profitable sometimes!...

When I saw that sample first time during the Vth UFO Forum in Wrocław, I remained myself the most mysterious animal Chiroterium or Cheirotherium (it literally means an animal with hands), which is very well known to scientists from the Trias sediments. A problem with Chiroterium is a fact that there has not been found any skeleton of that animal! No one bone of it has been found by paleontologists since a beginning of 19th Century! The traces only, and nothing more.

But the Chiroterium left traces very similar to the human's palms - converted of 180 degrees. Its 1st finger is the 5th human one. The traces are similar to the human's feet ones. The human traces in the Trias?

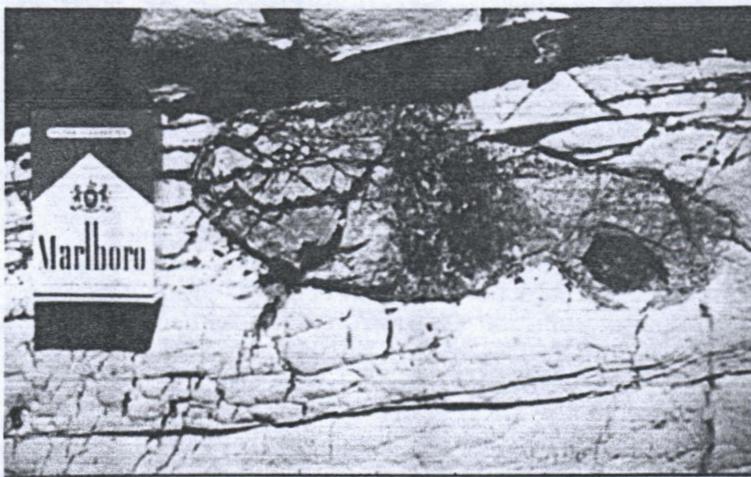
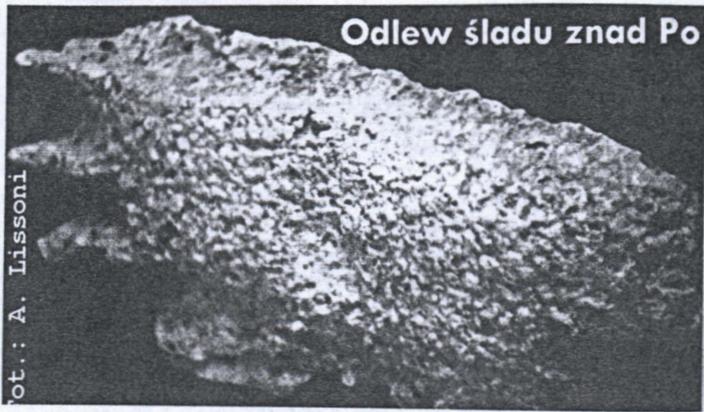
The strange and odd traces of the bare feet and boots were described a lot of times. The oldest ones are known from the Vend period and they are 650,000,000 years old. My Slovakian partner Dr. Milos Jesensky discovered and examined traces of the human's feet in a neighborhood of the Martin town. They are 50-55 million years old. Now, we have the traces from behind 230,000,000 years... It is a very great pity, that unknown life form stepped with its hill onto the trace of toes. We do not know, how many toes are there - three or five? If there are three toes, we can say that it was a reptile. If there are five ones...

NB, I had an impression that I had seen something like that. I browsed a memory of my PC and...

... and I found there three photographs, which I had received from my ufologist-mates from Italy. Two of them show us plaster casts of strange traces found at the Italian river of Po (Pad) in early 1990s. The third photo shows three Italian researchers of the Unknown Mysterious Animal, better known as Lizardman from the Po river: Dr. Sebastiano di Gennaro, Alfredo Lissoni and Vittorio Crosa - all of Milan. Those strange traces were very good impressed in the river sands and loams. Moreover they were light radioactive - 20-25 μ R/h - like on a place of the UFO-landing. They are also very similar to ones found by Mr. Jerzy Strzeja in the one of the Trias-quarries in the Upper Silesia province of Poland!

What about effects of that discovery? We have a problem either with the foot-prints of the Trias reptile, and that would mean that its ancestor walks and swims in the Italian, Georgian, South Carolinian, Floridian swamps and banks, or if it is the human's one - it would mean that the our own species is very much elder that we think. It is another possibility, another option, that they are the traces of our further Grandchildren, who can travel in space-time forward and backward. They could have their holidays on beaches of the Thetys Ocean and their foot-prints have lasted till our own times... To be true, I can not imagine myself an astronaut from another planet, who walked on the sands on his bare feet, however I may be wrong at all.

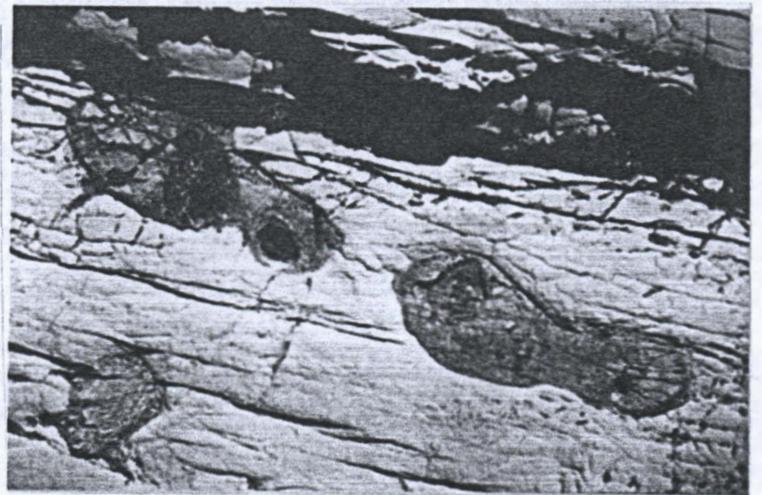
We can not talk about 'malicious' mollusks, which made those foot-prints. That explanation served by two scientists does not keep itself in a fire of criticism. The scientists are frightened by the Beringer's Case and it paralyzes them, their will and desire of discovering the Unknown. Our rationalistic science remains itself a dog, which turns around, trying to catch his own tail...



Some days ago, I received an e-mail from my Czech friend Mr. Jiri Wojnar of Cesky Tesin, who had sent to me some photos of the boot-prints from the Korfu island. They are not so old - they count 'only' 1,000,000 years! Does it mean that one million years ago people wore modern boots on their feet???... I must admit that a history of our civilization must be write ab ovo again!

Elaborated by Robert K. Lesniakiewicz

Vice coordinator of the MCBUFOiZA



P2

3つの写真を撮影できた。撮影者の乗った自動車は、走行していた。したがって、もし音が灰色のオブジェクトから出ていたとしても、彼らは聞くことができない。

円盤状のUFOはあまり速く飛んでいなかった。また、それは地面から約500フィートに思えた。これはマレーシアで得られたUFOの最良の白昼写真である。

2002年1月および2月に、マレーシア半島の北部にはあ

るUFO活動があった。三角形に形作るUFOはベナン島沖の海の上を2度低く飛んで観測された。またある時は、2つの明るいUFOが異なる2日に島の上で停止飛行した。したがって、UFOに関する限り、2002の前半は面白い年であった。我々は、まだUFO体験者が姿を現すのを待っている。我々がそれらの写真を持つことができたならば、それは非常に刺激的だろう！

日本UFOシンポジウム2002



時:2002年6月30日午前9時30分~午後4時30分

場所:東京北区王子「北とびあ」

主催:ユートピア・ネットワークUtopia Network

全体テーマ:「宇宙交流時代」

司会: 中村 豊

講演講師speaker&題目Subject

- 1,竹本 良 (UFO研究者):「テロとUFO:地球外生命との交流が21世紀をおもしろくする!」
- 2,エハン・デラヴィ Echan Deravy (リアルエイジ&UFO研究者):「リアルエイジのUFO問題」
- 3,天宮 清 (UFO研究者)天宮清:「UFO知性が人類に求める生き方」
- 4,荒川明子 (UFOコンタクティ)「宇宙への旅立ち」

本誌編者の講演内容

■「UFO知性が人類に求める生き方」

こんにちは、天宮清です。まず、この機会を私に与えてくれた、荒川明子さんに感謝したいと思います。私は1960年に日本の民間UFO研究団体、宇宙友好協会に入りました。団体の機関誌で多くの海外UFO情報を知りました。

私は「まず自分がUFOを見なくては」と思い、いくつかの実験を試みました。豆電球の点滅でモールス信号を送ったり、音声を光の波に変えるカーボンマイクを使った装置で空に向けて発信しました。当時、私は宇宙船を意味する「VENTLA」という言葉を使って呼びかけました。その結果、大きな動く星を観測しましたが、しかし後になって、それは人工衛星エコーの可能性がある、と思うようになりました。

そんなある晩、東京田端の自宅の二階で弟が見つけた光った物体を目撃しました。この光った物体には、「面積」がありました。星というのは、いくら拡大しても点にしか見えません。しかし、輪郭を持つ光、それを我々は「面接を持つ光体」と表現しています。それは、こんな形でした。(白板に図を描く)

私は「UFOの飛行には意味がある」という主張を持っています。1952年のワシントン事件は、民間人の知らないレーダー管制と戦闘機で起ったものです。レーダー面のブリップは、Uターン、直角ターンを見せました。地球の航空機には出来ない飛行です。また、ワシントンの国会議

事堂は飛行禁止地域です。そういう重要な場所に、外部からの侵入を許した、政治の中枢に侵入する者があった、という事件でした。

1954年、英国ロンドン近郊のレーダーサイトに毎日正午になると、最初「馬蹄形」ないしアルファベットの「U」の字形で現われたブリップが、それを解いて2本の平行線となり、最後にアルファベットの「Z」字形になったのです。「U=Z」という信号でした。当時の軍部が、それを解説した人は「Uはウランウムで「Z」は「終わり」、つまり原水爆に対する警告と考えたそうです。ローマのパチカン上空では、UFOが十字を描きました。十字はキリスト教の印です。「わたしは、ここにいる」という意思表示でしょうか?

トリニダデ島の場合は、地球観測年に起りました。気球を打ち上げてそれを観測していたところ、気球が雲に突入して、つり下げた観測機械を失って現われました。そして、そのそばから、UFOが現われたのです。私はこれを「地球観測よりも、我々(UFO)をもっと観測せよ」という意思表示だと主張しています。

また、よくUFOが衝突コースで旅客機に接近してくることがあります。飛行機は回避できません。UFOはギリギリまで接近しますが、自ら衝突を回避し去っていきます。「我々を恐れることはない、(信頼せよ)」という意思表示です。戦闘機の場合は、攻撃しようとするブラックアウトに陥ります。「我々を攻撃するな」という意思表示です。民間機の場合、UFOが飛行機と並んで飛行することがあります。これは「私は大空の友人だ」という意思表示です。

この様なUFO飛行のみられる意思について、Richard Hallという研究者も述べています。

SAC、STRATEGIC AIR COMMAND、戦略空軍は(冷戦時代)、水爆を腹に世界のどこへでも出撃する部隊でした。(当時)米国には早期警戒レーダー網が張り巡らされていました。そうした時、謎の編隊が米国本土に接近する事件がありました。敵襲なら報復措置をとらなければならない事態です。しかし、その編隊は本土接近の手前で消失しました。このような事件によって、すぐ報復をするような体制が改善されたそうです。(1971年、米ソが調印した偶発防止協定など)

ベトナム戦争の時は、非武装地帯に現われた「謎のヘリコプター」として現われました。なぜヘリかというと、

UFOはホバーリングするからです。戦闘機が謎のヘリに向かって発射したミサイルが、目標の消失によって味方の軍艦に命中する「誤爆」事件があり、戦線は混乱しました。結局、アメリカはベトナムに勝てなかった訳ですが、我々はこの当時「UFOは弱い者の味方だ」と喜んだものです。

ミニットマン・ミサイル基地では、巨大なUFOが接近し、弾頭の中の目標番号を変えるという事件もありました。

我々の世界もそうですが、宇宙空間は「平和」であるべきです。(聴講の紳士がうなずく)その平和を乱す兆候を宇宙パトロールが察知して乗り出すということは自然なことです。

世界に配備された多くの核兵器は地球の未来を脅かし続けています。「最後の核兵器がこの世界から処理されました」という知らせを世界が聴く日の一日も早く来ることを望むものです。

さて、ちょっとここで気分を変えて、私の手元に届いた興味深い情報をお知らせします。この写真は、最近ポーランドのロベルト・コンスタンチン・レシニャキエヴィチ氏から送られてきた2億年前の地層で見つかった足跡だそうですか。最初のは約26センチ。我々とほぼ同じくらいです。このプリントのマルボロの箱の幅が5センチで、実際の幅が5.5センチなので、その比率で足跡の長さは24.2センチです。

さて、私は今年の6月24日、米国の友人とレイニア山に行きました。この山はインディアンから神の山として扱われていて、こんな伝説があります。

昔、大洪水が襲ったとき、神様は「この山の上にかかっている雲に向かって、矢を射て」と酋長に言った。彼らは次々と矢を雲に向かって射ると、矢は繋がって、一本のロープとなった。彼らはそのロープを伝わって雲の中に非難した、という物語です。

人類の歴史なんて、短いものです。宇宙の時間スパンから見れば、1万年前の壁画にこんなものがあります。(図に描く)。私の見たドーム付UFOと似ています。

なぜUFOは核兵器に接近するか。そのヒントとなる情報を、最近米国の友人を通じて入手しました。一つはチェルノブイリ原発事故の直後、赤いUFOが現われてビームを放射し、放射能を軽減させたので作業がしやすくなったということ。もう一つはウラニウム採掘現場上空にUFOが現われ、強烈な光りを放射し、去ったあと、ウラニウム鉱石が別な物質に変化していた、という出来事です。

米国の友人は、「UFO問題は社会を変え変革する力を持っているが、広い社会的視野を持たず、自己満足で研究をやっていたら、UFO問題に対する社会状況は100年たっても変わらないだろう」と言いました。

地球が自らの原因によって、自ら滅びるのは勝手です。しかし、宇宙に迷惑をかけてはならないのです!

Japan UFO Symposium 2002

Time: June 30, 2002 9:30 AM ~4:30 PM

Place: Tokyo Kita Ward Oujl Kita-topia

Host: Utopia Network

Overall Theme: The Age of Cosmic Relations

Chairman: Yutaka Nakamura

Speaker and Subject

Ryo Takemoto (UFO researcher). "Terrorism and UFO: The relations with extraterrestrials will make the 21st century exciting!"

Echan Deravy (New Age and UFO researcher). "The UFO issue of the New Age."

Kiyoshi Amamiya (UFO researcher). "The way of living that UFO intelligence wants the human race to follow."

Akiko Arakawa (UFO Contactee). "The journey into space."

Contents of the lecture by the Editor

The way of living that UFO intelligence wants the human race to follow

Hello, I'm Kiyoshi Amamiya. First of all, I would like to thank Ms. Akiko Arakawa for providing me with this opportunity. In 1960, I joined the civilian UFO researching organization, the Cosmic Brothers Association. Through the organization's bulletin, I acquired much information regarding UFO from overseas.

Firstly, I thought that "I must see UFOs for myself", and attempted a number of experiments. I tried sending light signals with a light bulb in Morse code, and used a carbon mike to send sound signals converted into light signals into the sky. At the time, in my message, I used the word "VENTLA" which meant spaceship. As a result, I observed a large moving star, but later on, I came to believe that it may have been the artificial satellite Echo.

On one of those nights, I witnessed a luminous object that my younger brother discovered, from the second-story window from my house in Tabata near Tokyo. This object had "area". No matter how much you magnify a star, it still appears as a point of light, but lights with a definite edge, we describe as a "luminous object with area". The object I saw looked like this. (Draws a diagram on a whiteboard)

I hold the belief that UFO flights have meaning to them. The incident in Washington D.C. in 1952 occurred among the deployed fighter planes and radar operators not known to civilians. The blip on the radar screen displayed maneuvers such as 90-degree turns and U-turns — maneuvers that Earth's planes cannot perform. Also, the airspace around the Congressional Building is off-limits for any normal flights. It was an incident where intruders were allowed in such an important place and an incident where airspace above the heart of politics was invaded.

1954, in the outskirts of London above a radar site, another occurrence took place on a daily basis at noon. Blips which would first appear in a "horseshoe" shape would then form two parallel lines, then the alphabet "Z". It was the message "U=Z". The military or whoever read it interpreted it as "U" being uranium, which was equal to "Z", the end, a warning against nuclear weapons.

In the sky above the Vatican in Rome, UFOs formed a cross. The cross is a symbol for Jesus Christ. Could this be a signal of the will that "I am here" ?

In the case of Trinidad Island, the incident occurred in the year of Earth observation. While a weather balloon was being monitored, the balloon disappeared into a cloud, reappeared with its observation instruments missing, and a UFO appeared next to it. I assert that this is show of will of the wish for us to "observe us (the UFOs) rather than observe the earth" .

Also, there are frequent cases where a UFO heads for a direct collision course with airliners. The airliner cannot evade and the UFO seems as though it would collide, but then turns away at the last moment by itself. This is a display stating "Do not fear us (trust us)." In the case of fighter planes, they go into blackouts when they try to attack the UFOs. This is a display stating, "Do not attack us" . In the case of civilian planes, the UFOs sometimes fly alongside them. This is a display stating, "We are friends of the sky" .

A researcher named Richard Hall has also commented on the will behind these UFO flights.

The SAC, or Strategic Air Command, was a unit during the Cold War that would deploy to anywhere in the world, carrying thermonuclear weapons in their belly. At the time, the United States had a network of early warning radars. In that sort of time, an incident occurred where an unidentified fleet approached the United States mainland. It was a situation where retaliation was called for if it were an enemy attack. But, the fleet disappeared right before reaching the mainland. With incidents such as these, the system of immediate retaliation was revised. (The Accident Measures Agreement of 1971)

During the Vietnam War, they appeared as "unidentified helicopters" in the demilitarized zone. They were called helicopters since UFOs hover. Missiles that were fired at the mysterious helicopter, with the sudden disappearance of the target, struck a friendly naval vessel causing the "friendly fire" incident, bringing about considerable confusion.

In the end, America was unable to win against Vietnam, and we had rejoiced that UFOs were allied

with the weak.

There was an incident where a gigantic UFO approached a Minuteman Missile base and changed the target numbers in the warhead.

As it is true for our own world, it is also true that the space should be a peaceful place. (An attending gentleman nods in agreement) Thus, it is natural that space patrols would detect any signs of disturbances of the peace, and intervene.

The many nuclear weapons stationed around the world continue to threaten world peace. It is my wish that I can hear the news "All nuclear weapons have been eliminated from the world" , someday as soon as possible.

Now, changing topics a bit, I have an interesting piece of news I have just received that I will share with you people. This is a picture sent to me recently from Robert K. Lesniakiewicz in Poland. It shows footprints discovered in a layer of earth from about 200 million years ago. The first is about 26 cm in length, roughly the same length as for us humans. The Marlboro box next to it in the picture is about 5 cm wide, which in reality is about 5.5 cm in width. Therefore, the footprint in the picture is about 24.6 cm long.

On June 24 of this year, I went to Mt. Rainier along with my friend in America. This mountain is revered as a mountain of the gods. It has a legend pertaining to it that goes like this:

A long time ago, when a great flood inundated the region, God said "fire arrows toward the cloud above the mountain" to the chief. When they fired many arrows, the arrows joined together to form one long rope. The people climbed the rope and fled the flood into the cloud.

The history of the human race is still short compared to the history of the cosmos. There is a wall painting from 10,000 years ago like this (draws a diagram). It is similar to the domed UFO I have seen myself.

Why do UFOs seem appear near nuclear weapons? I have recently acquired data through my friend in America that may be a hint to answering that question. First is the fact that immediately after the meltdown accident in Chernobyl, a red UFO appeared on the scene and emitted beams that reduced the radiation in the area, thus making the cleanup process easier. Another is the fact an incident where, a UFO appeared over a uranium mining site, emitted a very strong light, and after it had left, the uranium had transmuted into a different substance.

My friend in America has said that, "Although the UFO issue has the power to revolutionize society, if research is carried out only for the purpose of

complacence without having a wide social perspective, changes in the social situation for the UFO issue will never come in a 100 years."

Earth is free to destroy itself because of its own problems, but we must not cause trouble for the rest of the cosmos!

■参考資料

ロシア核ミサイルの故障と過去のUFO事件

『THE UFO RESEARCHER』1996年1号11ページ「巨大UFOは、核ミサイルの存在意味を教えた?」という記事に、UFOの出現によって核ミサイルが発射直前の状態になったことが出ている。こうした事態が老朽化したミサイル管理システムに実際に発生している事が最近の報道にみられる。しかし、その事故がすぐミサイルの発射につながるものではないとしている。つまり「暗号」を入力しないとならない訳だ。本誌の記事の文章にも「誰も暗号を入力した者はいないのに」とあるのは、やはり最終的な発射の手続きには暗号が必要であることを教えてくれている。

核ミサイルの弾頭から核兵器を撤去しない限り、どこがどう狂って核付ミサイルが頭上に飛来するか分からないという危険な世界に我々は住んでいるということを改めて認識しておきたい。そして、そうした危険をUFOの実力行使が教えているようだという印象も補足しておく。



1997年(平成9年)5月13日(火曜日)

夕刊 言 置 楽 屋

【ワシントン12日〓赤座弘一】十二日付の米紙ワシントン・タイムズは、ロシアの核ミサイルが老朽化からしばしば故障、スイッチが「戦闘状態」に切り替わり、米国に向けて発射寸前の状態になることが、米中央情報局(CIA)の機密

ロシア核ミサイル しばしば故障 スイッチON

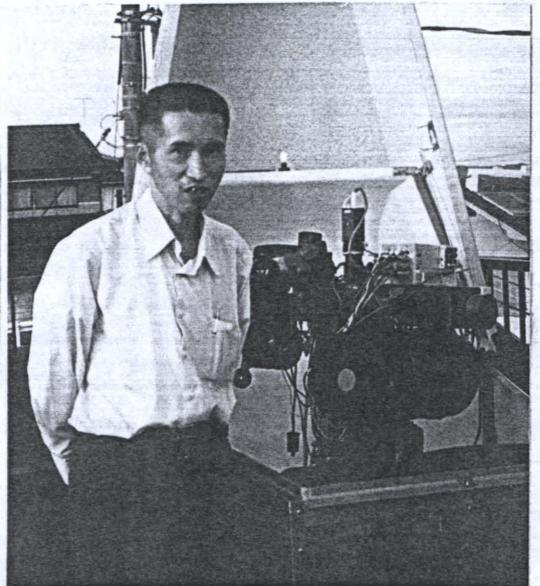
報告書からわかったと報じた。同紙によると、機密報告米紙報道「ただちに誤射の可能性低い」書はロシアの元戦略ロケット軍将校の証言に基づく。

同軍では核管理システムがい、とも指摘した。老朽化し「自然に『戦闘状態』に切り替わる故障が一の老朽化問題については、度ならずあった」としている。ロシア国防相が二月、適切な予算措置が取られなければ安全が保障できないと警告しており、同報告書はその直後の三月にまとめられたという。

悲報!

日本宇宙現象研究会副会長 池田隆雄氏急逝

MUFON日本代表/UFO情報分析/UFO観測装置開発者



■1998年10月24日福山市の池田宅にて。編者撮影。池田隆雄氏が長い年月をかけ改良に改良を重ねて完成した「UFO観測装置」を前に。

■池田隆雄氏急逝の知らせを受けてから

去る6月10日夕刻、勤務から帰宅してメールをチェックしていたところ「池田隆雄副会長逝去」の文字が飛び込んできた。一瞬、我が目を疑った。「エエッそんな馬鹿な!」と思った。メールは日本宇宙現象研究会会長並木伸一郎氏からであった。正午過ぎに発信されたメールを開くと確かに、その日池田氏夫人よりの知らせで、池田隆雄氏が2002年5月28日に、逝去した旨が記されてあった。享年51才とのことであった。

に悲報を受けた衝撃の気持ちを並木氏にメールし、秋田の駒ヶ嶺氏が書き込みする掲示板を見ると、やはり並木氏からの池田氏逝去の悲報を中心に、各地の研究者による悲しみの言葉やお悔やみの言葉が書き込みされていた。

私は目前に迫った渡米準備と雑誌原稿の締切に迫われ、心の動揺を押さえて何とか計画を遂行した。帰国後に着手した紀行文執筆などの作業を終えて、ようやく7月14日の夜、池田氏宅へ電話した。電話に出られた紀子(のりこ)夫人によると、病名は間質性肺炎と肝硬変とのことで、池田氏は5月14日に入院した。奥様によると「急性で、この病気は治りにくいと言われた」とのことで、入院して2週間後に亡くなったことになる。

私は、池田氏から5月12日付けの手紙と共に『UFO information』を受け取ったが、そのことに対するお礼のメールも手紙の返事も延ばし延ばしにしていたことを悔やんだ。彼は、私への手紙を書いた二日後に入院したようだ。

池田氏からの最後の手紙には、荒井欣一氏急逝の衝撃と荒井氏についての思い出、そして彼自身の「持病」について記されてあった。編者の持つ家庭医学の本に、間質性肺炎は「ある薬剤を長く用いて起る」と書いてあったので、直接の死因となった二つの病名が「持病」とは思えず、その持病に用いた薬剤が急性の発病の要因ではないか?と思った。「UFO観測装置」も改良に改良を重ねている途上であり、「UFOカタログ」などの制作も志なかばであった。

■池田隆雄氏の思い出

私が池田隆雄氏を知ったのは、1971年頃である。私の家が東京のISS(インターナショナル・スカイ・スカウト)という青少年UFO愛好家の連絡所になっていた関係で、彼から調査依頼のような文書もらったのが最初と記憶する。

真面目な文面を読んで、私は彼の主宰する研究サークルの会合に出てみた。場所は池田氏が借りていた借家の2階であったと記憶する。この当時、男鹿半島で東京在住の少年が撮影したというUFO写真が話題となっていて、私は

撮影者の親と会って写真を買ひ、また少年の自宅を訪れて話を聞いた。結果、そのUFO写真は窓ガラスに張り付けたトリックと断定。池田氏ともこの件で活発な議論を交わした。

また、池田氏が発行した冊子に、北海道で接近遭遇した青年の話が紹介されていたので、この青年(とはいっても私より一つ年上であった)と何度か会い、その目撃図を描いてもらったこともある。

私はその後、池田氏の研究グループの顧問となり、池田氏の発行する『アルゴ』という冊子に、星野空雄といったペンネームで文を書いた。

その直後から私の身边があわだしくなり、自宅を離れて活動するようになって、池田氏からの連絡に対する返答も出来ぬまま、10数年の歳月が流れた。

しかし、私はあわだしい中でも、市販のUFO雑誌で池田氏の活動を知っていたし、1974年に彼が大陸書房から出した『日本のUFO』という本も知っていた。「あの池田氏なら、これくらいはやるだろう」と思っていた。

1990年11月、石川県羽咋市で開催された「宇宙とUFO国際シンポジウム」に大阪UFOサークルのバスツアーで参観した私は、池田氏の関係者から池田氏の住所を知った。

この頃、私は単独で自由にUFOを探求する立場をとっていたので、池田氏に手紙や発行物を送りUFO研究という共通の同好者として交流を開始した。1997年9月22日、大阪UFOサークル主催の「第1回UFOフォーラム」で、私と池田隆雄氏は約20年ぶりの再会を果たした。20年前よりやや元気がないように感じた。

そして翌年の1998年10月24日、私は池田氏が開発したUFO観測装置を見に、福山市の彼の家を訪問した。この訪問は、翌年5月に開かれる大阪UFOサークル主催の「第4回UFOフォーラム」の講演者に池田氏が決定したことによるもので、私が事前取材を兼ねて赴いたものである。

池田氏は私を車で風光明媚な納の浦という場所に案内してくれ、美しい海と行き交う船を見ながら食事をした。この詳細については本誌1999年No.1「池田隆雄氏製作のUFO観測装置を取材して」に報告してあるので、参照して戴ければ幸いである。

池田氏の著作『日本のUFO』「あとがき」によると、宇宙に非常に興味を持ち、反射望遠鏡を自作して天体観測を行っていた池田隆雄氏は、1970年秋、書店で見つけた『空飛ぶ円盤実見記』を非常に衝撃と共に、それを繰り返し読んだという。その一部を紹介して、彼の冥福を祈りたいと思う。

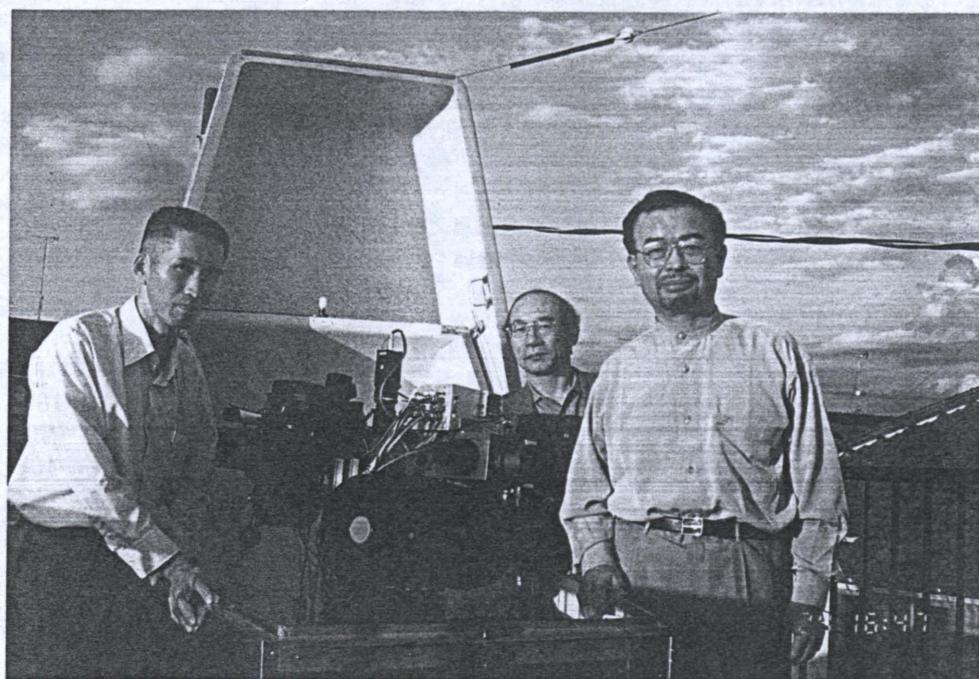
『現在までに世界各地で起ったUFO事件は氷山の一角でしかないといえるが、その氷山の一角を通して巨大な文明がその背後に存在することを暗示している。UFOは単なる現代科学を超越した乗り物ということだけではなくて、その搭乗者たちのはかりしれない科学水準の高さの一端を示すとともに、その乗り物を生み出した文明があることを如実に物語っているのである。まさに、地球上に人類が誕生して以来の未曾有の大事件であるといえよう。それゆえ、多くの人々がこの研究に参加してほしいものである。…後略…(1974年3月)』



■1999年5月2日大阪UFOサークル主催「第4回UFOフォーラム」でUFO観測装置について講演する池田隆雄氏。右は1996年の「第1回UFOフォーラム」で編者と再会した時のスナップ。



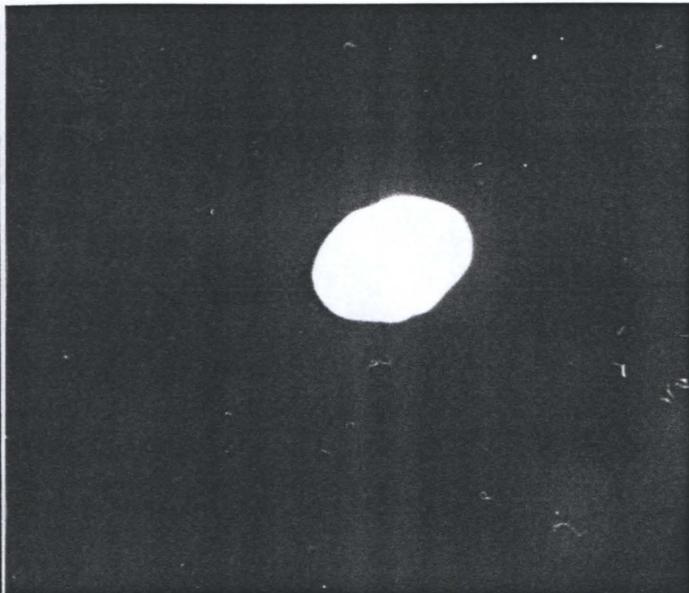
■1998年10月24日、福山市の池田宅屋上に設置されたUFO観測装置を中心に、左から池田氏、天宮、斎藤俊徳氏。斎藤氏は今年7月27日、大阪科学技術センターで「UFO&コンタクトイへの基礎知識」というテーマで講演の予定。



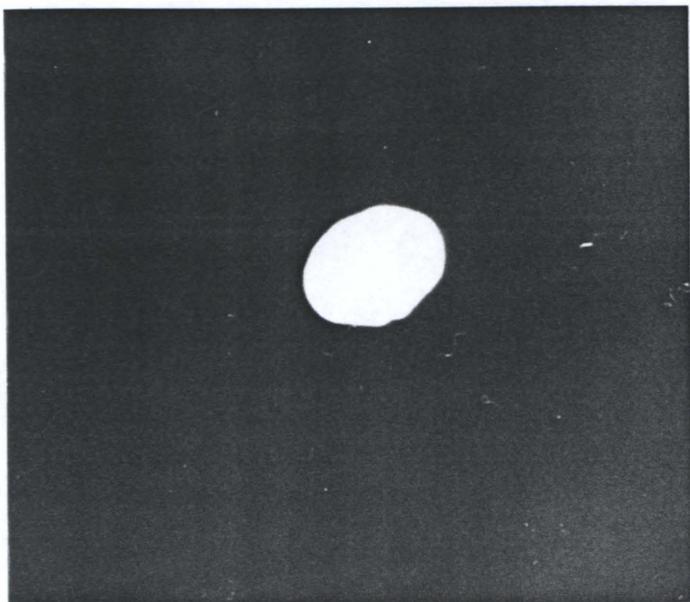
IFO? UFO? 東北の空に気球状物体が2日間連続出現して長時間目撃され、騒がれる



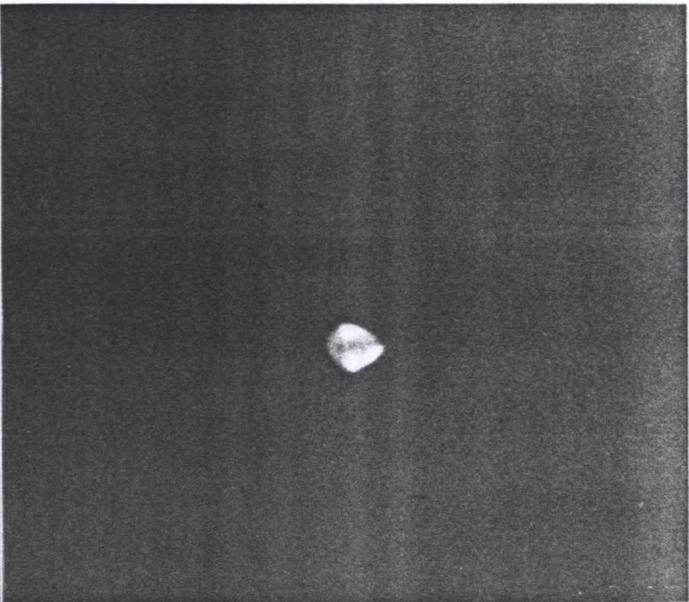
撮影者 菅原幸三 H14,5,23(18h55m~19h05m)
撮影場所 水沢市佐倉河富田143-2
ニコンF-801 トキナーズーム150~500mm F5.6
プロビア100F(1.6×テレコン800mm)8秒露出



撮影者 菅原幸三 H14,5,23
撮影場所 水沢市佐倉河富田143-2
ニコンF-801 トキナーズーム150~500mm F5.6
プロビア100F



撮影者 菅原幸三 H14,5,23(18h55~19h05m)
撮影場所 水沢市佐倉河富田143-2
ニコンF-801 トキナーズーム150~500mm F5.6
プロビア100F



撮影者 菅原幸三 H14,5,24(7h05m)
撮影場所 水沢市佐倉河富田143-2
ニコンF-801 トキナーズーム150~500mm F5.6
プロビア100F(1.6×テレコン800mm)8秒露出

2002年5月23日と24日の両日、宮城県、岩手県など東北地方の上空に気球状の物体が気象台など専門機関を含めた地点から長時間にわたって目撃され、新聞社や天体観測者によって撮影された。

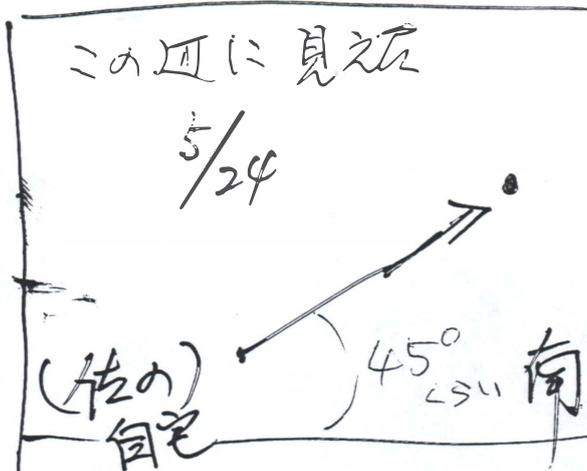
編者がこのことを知ったのは鹿角UFO研究会の掲示板「不思議談話室」で、同掲示板で紹介されたニュース源にあたって情報を集め、簡単だがその概要を時刻、場所、特徴で一覧してみた。(表参照)

5月25日朝、編者は天体観測の専門家でも本誌の読者でもある水沢市「水沢星のサークル」主宰の酒井栄氏に電話してみた。すると「観測仲間では気球と確認済みだが、これ

を撮影した仲間もいる」とのことで「IFOとしての資料が欲しいので、ぜひ写真を手入して送って欲しい」と依頼した。

6月27日に大判にプリントした写真が届いた。撮影者は水沢市佐倉に住む菅原幸三氏で、撮影は5月23日午後6時55分から7時5分の間が3枚と、24日が一枚。

カメラはニコンF-801、トキナーズーム150mm~500mmに1.6倍のテレコンバーターを付けて焦点距離800mmで撮影した。フィルムはプロビア100F、絞りF5.6でシャッターは2秒~8秒。カメラは露出が難しい。三脚に固定しても、微妙なシャッターの切り方でブレるこ



■4枚の写真の撮影者、菅原幸三氏による24日の状況図

無人気球で高度53キロ 世界最高

大船渡市三陸町吉浜の文部科学省宇宙科学研究所三陸大気球観測所(広沢春任所長)は23日、気球の飛行性能実験を行い、高度53キロを達成、無人気球の世界最高高度記録(51.8キロ)を更新した。

記録を更新した気球は、フィルムの厚さ3.4マイクロメートルのポリエチレン製で、最大直径54メートル、体積60000立方メートル。カメラや衛星利用測位システム(GPS)など約10の観測機器を搭載し午前6時35分に打ち上げた。

毎分265メートルの速度で順調に上昇し、午前10時前に同観測所の東30キロの上空で記録を更新。約10分後に53キロに達した。映像と高度記録を注視していた職員からは拍手がわき上がった。

気球は地上からの指令で人為的に破壊、同市吉浜湾沖35キロの海上に落下した。

今回の実験は新開発された超薄型フィルムの性能検証が目的。実証されたことで、さらに軽量化した気球開発の技術確立にめどがたった。宇宙研の山上隆正助教は「実験が成功し安心した。今後も長時間安定飛行可能な技術を開発し、将来は60キロを目指したい」と自信を深めた様子。

これまでの世界記録は1972年10月、米国で打ち上げられた51.8キロ。同観測所では昨年、50.7キロの日本最高高度を達成している。

『岩手日報』2002年5月24日

謎の飛行物体？県内各地で目撃

「光る飛行物体が上空に浮かんでいる」との情報で23日夕、県内各地から関係機関に寄せられた。

盛岡地方気象台は、同日午後6時ごろに飛行物体を確認。職員が双眼鏡で観察したところ、物体は気球のような物で無色透明。上空は弱い西寄りの風が吹いていたが動きはあまりなく、花巻市やや南上空に浮かんでいたという。光って見えたのは、西日に照らされたためらしい。

気象庁は、高層気象観測用の気球を毎日4回、仙台市と秋田市から打ち上げている。しかし、盛岡地方気象台によると観測用の気球は白色のゴム製で、透明な謎の物体とは別。大船渡市三陸町の宇宙科学研究所が上げた気球でもないことが分かった。陸上自衛隊岩手駐屯地によると、自衛隊ヘリが夜間飛行訓練中に謎の物体を確認。ただし、飛行高度よりも高い位置で物体が何であるかは分からなかったという。

気象台をはじめ、花巻空港、県警などが目撃者からの問い合わせに追われたが、物体は正体不明のまま夜の闇に消えた。

『岩手日報』2002年5月24日

ともある。

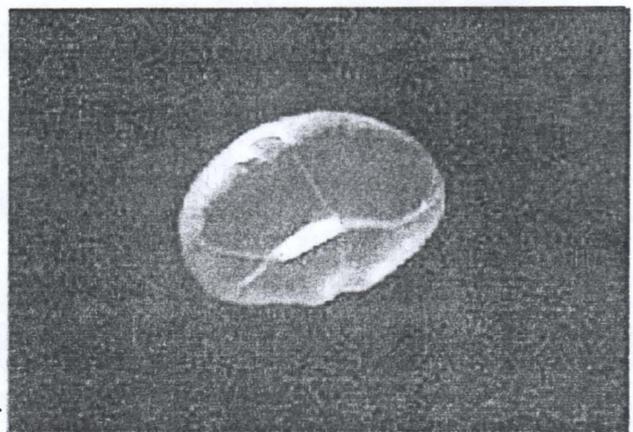
また、一般論だが、1時間以上も空にある物体なら、三脚に固定したビデオカメラでその動きの判る映像が撮れる絶好の機会である。通常の観測気球打ち上げと同じ気球なら、気球打ち上げの度に騒ぎが起るはずである。では、なぜこの2日間に限って、騒ぎとなった気球が見られたのか？ 継続時間、滞空時間など普通の気球とどこかが違っていたからこそ、騒ぎとなったのであろう。

5月24日の午後4時30分に宮城県古川市「パレットおおさき」屋上天文台10cm屈折望遠鏡＋ビデオカメラで撮影された物体の写真は、同じ時刻に撮影した月面と合成して、見かけの大きさの比較をしているのが興味深い。編者は、この写真の月面の円弧から月面全体を描いてみたところ、物体は月の視直径の6分の1であった。月面を視野一杯に捉えるのは、今や家庭用のデジタルビデオカメラで十分である。問題は0.5度という狭い視野に物体を捉え、刻々と微動する物体を追尾する困難さである。

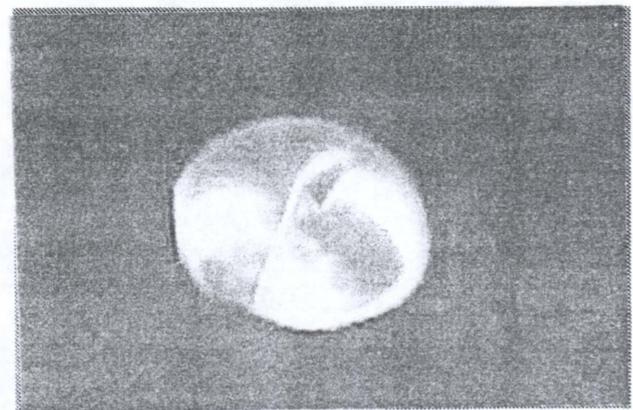
「該当する気球はないが、その形状から、気球の一種と考えられる」という結論になるかも知れないが、『ソ連東欧のUFO』p.163～に見られるように、気球状のUFOも考慮して、先入観を持たず正確な記録を採りたいものである。

気球状物体目撃概要

2002年5月23日	2002年5月24日
	<p>早朝：塩釜市 松島町 「オレンジ色に輝き、ほとんど動かなかった」 AM8:40 仙台市青葉区 河北新報社本社ビルから撮影</p> <p>日星：仙台、古川、気仙沼から目撃通報 PM1：古川市のパレットおおさきで、 南50°(仰角?)に物体を撮影。 「白昼、白く輝く。静止状態に近く、 微動で北に向かう。」</p> <p>PM4：花巻市で発見。ほぼ真上に静止。</p> <p>PM6：盛岡地方気象台職員が観察 「無色透明の物体」 PM6:50 盛岡市 岩手日報社屋から撮影 PM7:30 花巻市では姿を消す</p> <p>夕方：宮城県上空で暗い空を背景に -6~-7等に見える。 夕方：仙台市でオレンジ色 仙台管区気象台職員が双眼鏡で観察 「上空2000m以上の高さがあり、 気球か風船のようなもの。」 写真は「クラゲの形」に見える。 PM7:30 「オレンジ色になり明るさを減じる」 PM8前に「望遠鏡でも見えなくなる」</p>



■2002年5月24日朝方、仙台市天文台の望遠鏡で拡大撮影した「謎の気球」
Copyright (c) Sendai Astronomical Observatory.



宮城県上空に、またも珍客現る!

5月24日、宮城県各地で早朝から、空に白いものが浮かんでいるという目撃情報報道機関や気象台、天文台等に寄せられました。

パレットおおさき(宮城県古川市)でも、午後1時頃にこの物体を南の空50°に確認。屋上天文台の望遠鏡でこの物体の写真撮影を行いました。

その物体は、白昼、強烈な太陽光のもとせず、白く輝く光点として輝いていました。一見、星のようにも見えますが、注意すると「点」ではなく、大きさを持つ面物体であることがわかります。まるで、明るく小さく白いドーナツが、空に浮かんでいるようにも見えました。

双眼鏡や望遠鏡でこの物体を観察すると、下の写真のように、大きな半透明のバルーンのようなものでした。望遠鏡で拡大して観察しているうちに、少しずつ北東方向に動いているのがわかります。しかし肉眼では、じっとしているのに等しいほど、その動きはわずかなものでした。

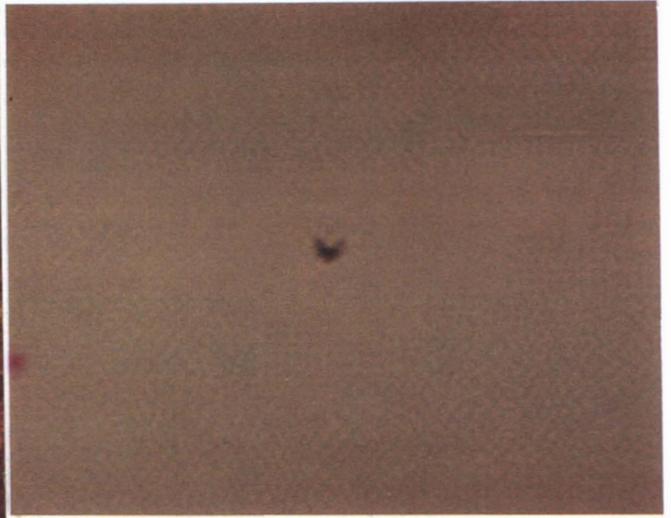
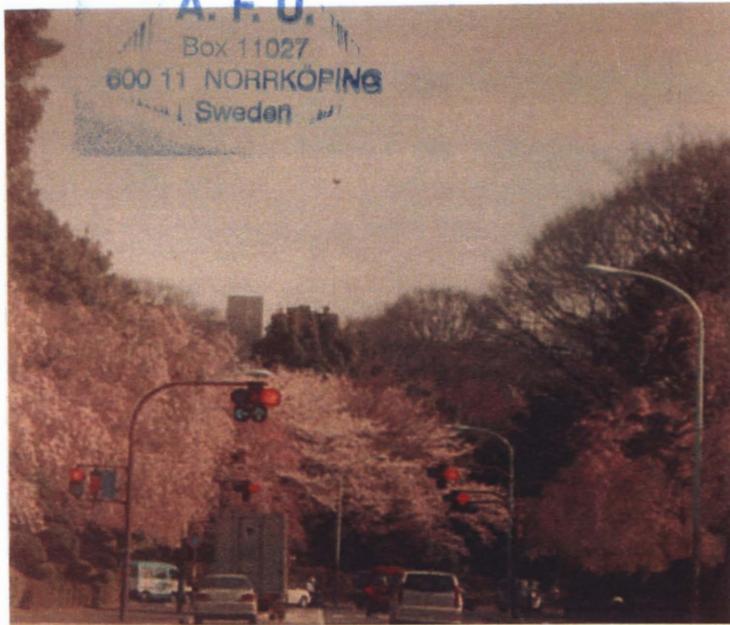
この気球のような浮遊物体は、その後少しずつ北の方に動いていきました。夕方になると、暗くなった空をバックに、マイナス6~-7等にもおよぶ強烈な輝きでした。それは、まるで自分の存在を人々にアピールするかのような明るさでした。

そして、太陽光が届かなくなる7時半ごろ、物体はオレンジ色に染まりながら明るさを落とし、8時前には望遠鏡でも見えなくなっていました。

文章・写真：パレットおおさき・遊佐



■ LATEST UFO PHOTOS FROM MALAYSIA(2): Ahmad Jamaludin



■東京上空のUFO!
 郡聡氏撮影のUFO映像から:①2001年4月6日12時50分。
 港区南青山にて。上は拡大



②2001年11月30日16時26分～29 練馬区神石井台にて



③2001年10月13日13:08神石井台にて 2001年10月13日13:05神石井台にて 2001年10月13日13:09神石井台にて